Hanga-Do

110

ご注文の方法

●電話・Fax・メール・葉書にてお願いいたします。

Tel. ０３（３２１９）２０２７

Fax. ０３（３２１９）２０２６

ﾒｰﾙ：info@hanga-do.com

〒 101-0051　東京都千代田区神田神保町 1-12　雅樂川ビル 1F

●送料は実費を頂戴いたします。

●ご送金は下記口座にお振込みください。

①三井住友銀行　神田支店（普通）１０６４０９３

口座名　有限会社　版画堂

②郵便局　００１８０－６－４１４８１２　版画堂

営業日　月～土（日・祭休業）10:00am ～ 6:30pm

http://www.hanga-do.com/

A　アルベルト・マルケ（1875 ～ 1947）　**165,000**

「男の頭部」 11.5 × 7.5 「a.m」のサイン　肉筆デッサン

「ウルディンスタイン東京」他シール付　全体に少ヤケ

B　アルベルト・マルケ（1875 ～ 1947）　**150,000**

「ポケットに手を入れる男」 15.5 × 7 「a.m」のサイン

鉛筆デッサン 「ウルディンスタイン東京」他シール付

1　フランク・ブランギン「風景」　180,000
1921年　17.5×35.3　サイン　水彩　少ヤケ　裏面テープ跡

2　アルフレッド・パーソンズ　80,000
「ソリー島」　39×27.5　サイン　水彩
裏打　マットヤケ　少シミ

3　ジャック・カロ「村の掠奪と火災」　65,000
『戦争の惨禍　No.7』より　1633年　8.7×18.8（紙寸12×22.5）
銅版　少ヤケ　少シミ　布で裏打

4　ジョージ・クローゼン「風景」　60,000
1929年　サイン　鉛筆デッサン
「岩井尊人」への為書有　少ヤケ

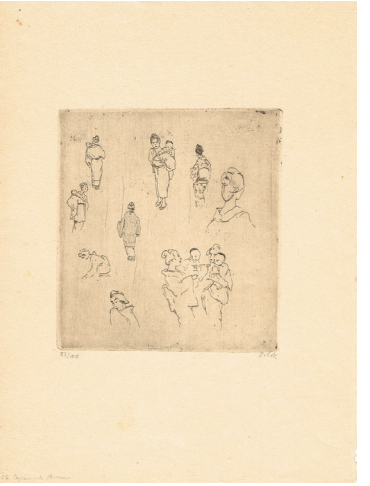
5　モーティマ・メンペス　28,000
「工房職人」　1888-1914年頃　15.2×13.2
サイン　銅版　僅かシミ

6　フェリックス・レガメ　35,000
「遠眼鏡」（1901年のグリーティングカードか？）
1901年　11.8×16　サイン　銅版　少ヤケ
裏面テープ2ヶ所

7　エミール・オルリック
「頭巾姿の日本女性」
『日本便り』より　1901-1903年頃
24×16　サイン　銅版
マットヤケ　裏面上辺にセロテープ跡
100,000

8　エミール・オルリック
「夕」『日本便り』より
1902年　16.5×12
サイン　銅版
裏面右上角にセロテープ跡
100,000

9
エミール・オルリック
「髪結」（仮）
1900年頃　17×12　限30
サイン　銅版
シミ　裏面少シミ
上辺左右角にテープ2ヶ所
50,000



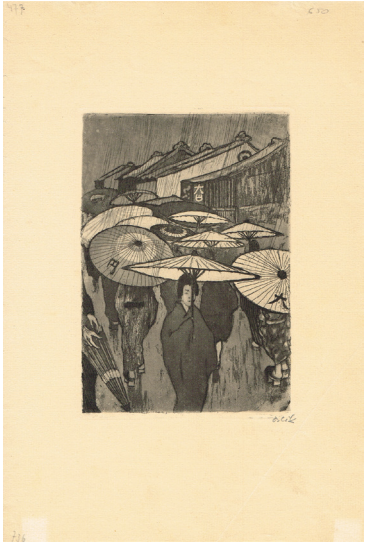
10
エミール・オルリック
「女性百態」（仮）
1900年頃　12×11
限100　サイン
銅版　少ヤケ　少シミ
35,000

11
エミール・オルリック
「御高祖頭巾の女」（仮）
1900年頃　8.7×6.5
サイン　銅版
少ヤケ　少シミ
35,000

12
エミール・オルリック
「母と子」
『日本便り』より
1902年　13.3×9.5
サイン　銅版
少ヤケ　マージン少断ち
65,000

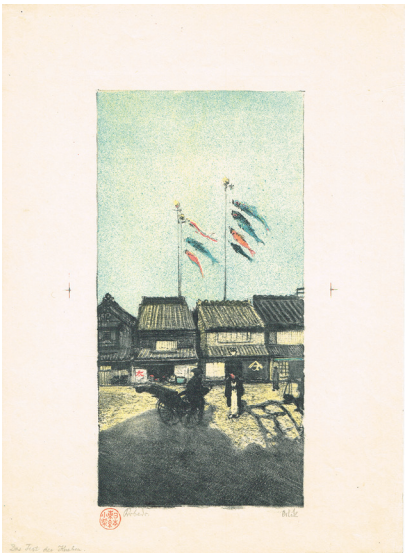
13　エミール・オルリック　50,000
「江ノ島附近」『日本便り』より
1902年　9.5×13.2　サイン　銅版
マージン左下に「Orlik」の朱印　少ヤケ

14　エミール・オルリック
「雨降り」
『日本便り』より
1901-1903年頃　16×11
サイン　銅版
左辺上部端にシワと切れ
右下角に折れ　全体に少ヤケ
75,000



15　エミール・オルリック
「手紙を書く少女」
『日本便り』より　1902年
17.5×12.5　サイン　銅版
少シミ　マージン下辺に1ヶ所水ジミ
裏面上辺両角に紙テープ2ヶ所
65,000

16　エミール・オルリック　100,000
「東京の街路」『日本便り』より　1900年
19.7×23.5　サイン　リトグラフ
左下に「日本東京小柴」のスタンプ印
裏面少ヤケ　上辺左右角にテープ跡



17　エミール・オルリック
「端午の節句」
『日本便り』より　1901-1903年頃
23.7×11.2　サイン　リトグラフ
左下に「日本東京小柴」のスタンプ印
僅かヤケ
85,000

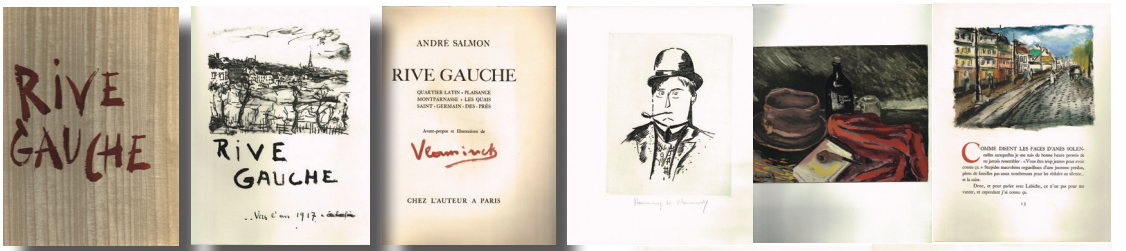
18　ワルワーラ・ブブノワ
「ユリの花」1956年　47×34.5
サイン　リトグラフ　保存不良
マージン断ち　四角に切れ　裏打
20,000

19　テニスン詩集『ヴィビアン』　23,000
1867年　モクソン版　判型43.5×31.5　ドレ木口木版9図入
英文49頁　保存不良　製本傷み　ヤケ　シミ

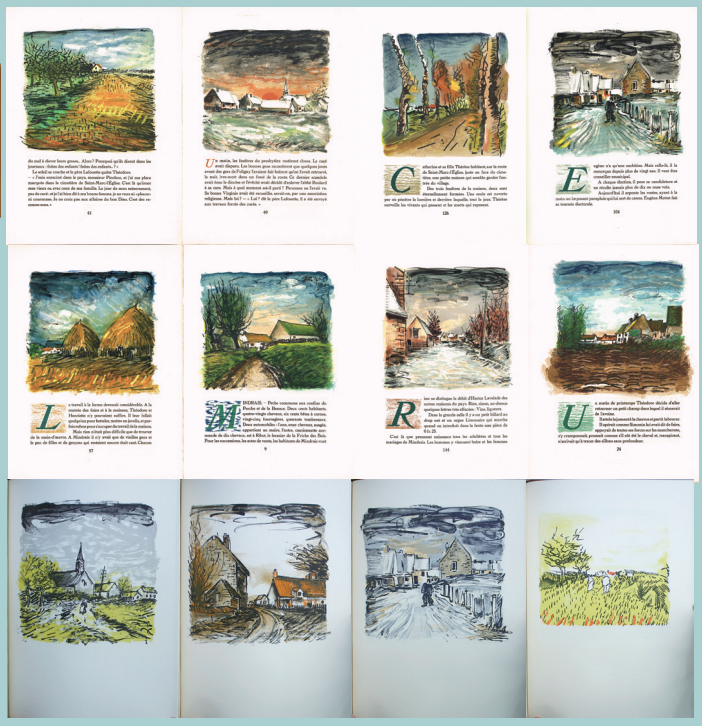
20　ズーニガー　15,000
「メキシコの女」
1982年　35×50.3　限90　サイン
リトグラフ　裏面四角にセロテープ跡

21　パブロ・ピカソ
「青春のロンド」
1961年　65×50（紙寸）
リトグラフ　全体にシミ
少ヤケ
15,000

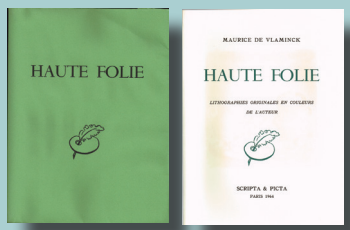
22　モーリス・ド・ヴラマンク
『EN NOIR ET EN COULEUR』
1962年　判型39×32　仏文100頁
オリジナル石版及び木版挿絵多数入
少ヤケ　ケース少汚れ　クロス傷み
170,000



23　アンドレ・サルモン『RIVE GAUCHE』　180,000
1951年　判型39×32　限300　仏文108頁
ヴラマンクのオリジナルリトグラフ挿絵と巻頭にヴラマンクの
サイン入り銅版画「自画像」1図入　少ヤケ　ケース少汚れ
クロス傷み



24　モーリス・ド・ヴラマンク
「HAUTE FOLIE」
1964年　スクリッタ・ユ・ピクタ刊
判型41×31　限260部の148番　仏文154頁
オリジナルリトグラフ挿絵48図とその他
にカラースィート版48図入　豪華革装
三方金　布函付　保存良好
400,000



25　モーリス・ド・ヴラマンク
『HAUTE FOLIE』
1964年　スクリッタ・ユ・ピクタ刊
判型41×31　限260部　オリジナルリトグラフ挿絵48図　仏文154頁　少ヤケ
ケース少汚れ
170,000

26　モーリス・ド・ヴラマンク
「作品」　デュアメル『放浪者』より
1925年　10×16　限25　中国紙刷
25,000

27　モーリス・ド・ヴラマンク
「作品」　ジュリアン・グリーン
『Mont Cinere』より　1930年
17×13　限25　中国紙刷
25,000

28　モーリス・ド・ヴラマンク
「作品」　デュアメル『放浪者』より
1925年　10×16　限25　中国紙刷
28,000

29　モーリス・ド・ヴラマンク
「花と花瓶」　1956年頃
37×27　限200　刷込サイン
リトグラフ　Reynord・Jacouet版
少ヤケ 裏面ヤケ
45,000

30　マリー・ローランサン挿画本
『サッフォー詩集』
1950年　判型22×14　限160
仏文57頁　銅版挿図及カット23図入
表紙少汚れ　カバー背下部に切れ
本文少シミ・少ヤケ
150,000

31　ジョアン・ミロ『リトグラフ　I』　15,000
1972年　WEBER GENF 刊　判型33×26　リトグラフ11図入
独文234頁　表紙少ヤケ

32　ジョアン・ミロ『リトグラフ　II (1953 - 1963)』　15,000
1975年　マーグ刊　判型32.5×25.7　リトグラフ11図入　仏文253頁

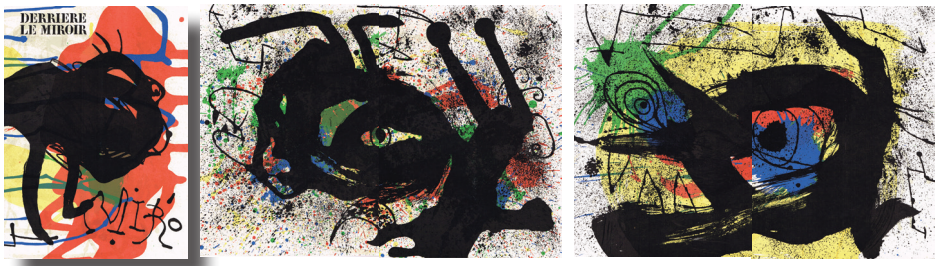
33　マルク・シャガール　石版レゾネ『CHAGALL　LITHOGRAPHE　II』　95,000
1963年　ムルロー刊　判型32×24.2　仏文209頁　オリジナルリトグラフ11図入　製本汚れ　少シミ

34
ジャック・プレベール
『ミロ画集』
1956年　マーグ刊
判型23.5×24
オリジナルリトグラフ8図入
（カバー含む　4図は見開き大）
仏文219頁　表紙少ヤケ
背上下辺部に切れ
70,000

35　ジョアン・ミロ　25,000
「作品」　1956年
デリエール・ミロワール10周年記念号より　37.5×55　リトグラフ
中折れ　画面中央上辺に切れ
少折れ

36 『デリエール・ミロワール　No.139・140』（ミロ号）　13,000
1963年　マーグ刊　判型38×28　ミロのリトグラフ5図入（内見開き3図）

37 『デリエール・ミロワール　No.186』（ミロ・彫刻号）　12,000
1970年　マーグ刊　判型38×28　ミロのリトグラフ見開き5図入　本文1·2頁落丁

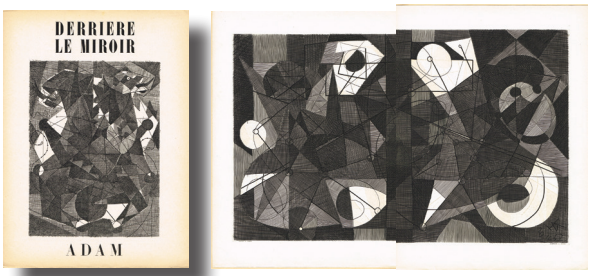


38 『デリエール・ミロワール　No.203』（ミロ号）　6,000
1973年　マーグ刊　判型38×28　ミロのリトグラフ見開き2図入

39 『デリエール・ミロワール　No.151・152』　25,000
1965年　マーグ刊　判型38×28　ミロのリトグラフ16図入

40 『デリエール・ミロワール　No.119』（詩・絵画・彫刻）　30,000
1960年　マーグ刊　判型38×28　ブラック・シャガール・カンディンスキー・レジェ・ミロ・ジャコメッティ他リトグラフ12図入　表紙少汚れ

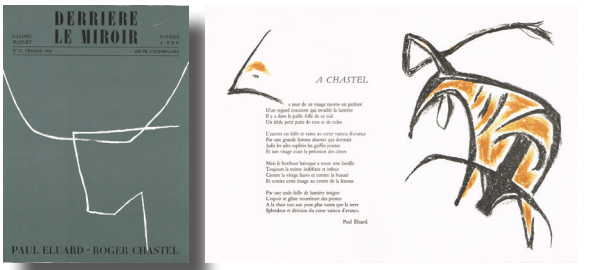
41　『デリエール・ミロワール　No.107・108・109』　40,000
1958年　マーグ刊　判型38×28　シャガール・ジャコメッティ・タルコアのオリジナルリトグラフとカンディンスキー・ブラック・レジェ・ミロのエスタンプ図版他入



42　『デリエール・ミロワール　No.24』（ADAM号）　10,000
1949年　マーグ刊　アダムの見開きの銅版画1図入　表紙少ヤケ
背切れ有

43　『デリエール・ミロワール　No.34』（UBAC号）　3,000
1950年　マーグ刊　UBACのリトグラフ1図入　表紙少ヤケ

44　『デリエール・ミロワール　No.158·159』
「LA REVUE BLANCHE」1966年　マーグ刊
限300「ALBUM DE LA REVUE BLANCHE」
附録付
15,000



45　『デリエール・ミロワール　No.17』　3,000
（エリュアードとカステル号）　1949年　マーグ刊
カステルのリトグラフ挿画入

46　『デリエール・ミロワール　No.222』
（GARACHE号）　1977年　マーグ刊
Garacheのリトグラフ10図入
6,000

47　赤松麟作　90,000
「花売大原娘」　112×41（軸寸201×55）　サイン　絹本　共箱　少シミ
画面上部に汚れ1ヶ所　少シワ

48　穐月　明「地蔵尊」70,000
53.5×26.5（軸寸137×38.5）　印
絹本　共箱　二重箱　画面シミ

49　麻生三郎「裸婦」　250,000
23×34　サイン　紙に油彩と水彩　中折れ

50　秋山　巌
「水を渡つて」
1978年　23×30
限100　サイン
木版　少摺りジワ
10,000

51　青山義雄　120,000
「海岸風景」（仮）　1928年
油彩12号（63×43）　サイン　キャンバス
画面割れ修復　元額汚れ

52　青山義雄「静物」　90,000
油彩8号（46×38）　キャンバス　サイン
画面少割れ　少汚れ　元額汚れと左辺に傷み
元額打汚れ

53　畦地梅太郎
「鳥と共に」　1958年
27×12.5　限100　サイン
木版　自摺　少ヤケ・シミ
裏面少ヤケ・シミ
四角テープ跡
50,000

54　浅野竹二
「御苑風景」（仮）
23×33　刷込サイン
木版　少ヤケ
6,000

55　天野邦弘
「Morningmoon」
40.3×40　限90　サイン
木版　マージン少シミ
5,000

56　荒井龍男「北海道風景」　300,000
油彩10号（32×52）　サイン　キャンバス　画面割れ修復有

57　池上　浄「裸婦」　35,000
油彩12号（50×60）　サイン　キャンバス

58　石井柏亭「風景」（仮）　35,000
1954年　33×50　サイン　水彩
画面縦にヤケ跡2ヶ所有　裏面ヤケ

59　伊藤総山　45,000
「富貴之図」
119×41（軸寸180×54）
サイン　絹本　共箱　ヤケ
汚れ

60　井上長三郎「作品」　80,000
油彩10号（53×33.5）　キャンバス

61　井上長三郎「馬」　45,000
油彩4号（24.5×33）　キャンバス　サイン

62
池田満寿夫
「踊る女」
1990年
23×17.3
限100
サイン
銅版
25,000

63　石井鶴三　　8,000
「木版賀状1葉」
刷込サイン　ヤケ　シミ

64　石井柏亭「白梅」　　90,000
金屏風　163×169.5　サイン　画面少傷
少汚れ　中央接目部分傷み

65　稲垣知雄　　35,000
「リボンをした猫」
45.5×32　限50　サイン
木版　裏面少ヤケ

66　稲垣知雄　30,000
「炉辺の猫」 1979年
41.5×30　限200　サイン
木版　マージン少シミ
少ヤケ

67　稲垣知雄　30,000
「猫の顔（10）」
53.5×40.5　限50　サイン
木版　画面少シミ　少ヤケ
マージン少シワ

68　稲垣知雄　　10,000
「猫の王様」 1974年頃
10×15　サイン　木版
テープ跡

69　井堂雅夫「東寺」
1981年　20.7×44.7　限200
サイン　木版　マージン少ヤケ
少シミ　裏面天地にセロテープ跡
15,000

70　井堂雅夫「清水寺」
1985年　21×44　限200
サイン　木版
僅かマットヤケ
13,000

71　岩田専太郎『洋装の女性』（仮）
20.2×16（額寸）　印　厚紙に水彩　仮縁額少傷み
140,000

72　岩田専太郎
「浴衣の女性」（仮）
33×24　サイン　水彩
特に縁に少汚れ
紙を板に貼り込み
四辺をセロテープ止め
セロテープ劣化変色
165,000

73　岩田専太郎　　6,000
『江戸』1図
20×29.2（紙寸）　ペン画
「江戸256」と書込
少汚れ少シミ

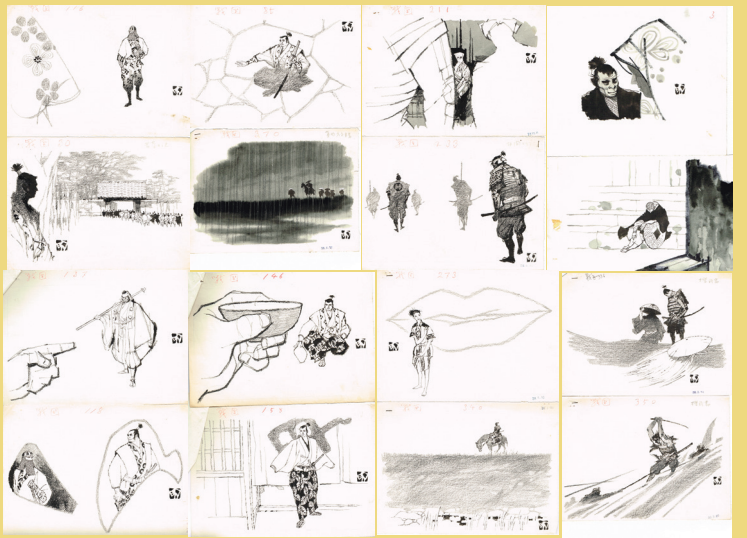
74　岩田専太郎
挿画『天狗』2図
20×24.5、22×26.2
（紙寸）　ペン　少シミ
少汚れ　インク汚れ
縁にセロテープ変色
「天狗9」「天狗181」と
書込
12,000

75　岩田専太郎
挿画『美しき闘争』
2図　18.3×28.5、18.3×
29.2（紙寸）サイン
ペン画　「美しき闘争48」
「美しき闘争106」と書
込　1枚セロテープ跡
共にシミ　角折れ
10,000

76　岩田専太郎　　23,000
挿画『鯉』4図　21.5×28（紙寸4図共）
ペン画　インクジミ　汚れ　角折れ　1枚は
右辺に千切れ　裏面に「鯉７」「鯉9」「鯉65」
「鯉83」「大阪送り」等と書込

77　岩田専太郎
挿画『午前零時』5図
昭和27年　23.5×28（紙寸）
サイン　ペン画　汚れ　シミ
テープ　四角にピン穴
千切れ　「零時31」「54」「67」
「94」「114」と書込
30,000

78　岩田専太郎
挿画『からす』3図
昭和32年頃　19×34.5、
27×39.（紙寸）　サイン
ペン葉　ヤケ　破れ
インクジミ　テープ跡
縁折「からす251」書込み
18,000



79　岩田専太郎
挿画『戦国』36図
昭和37 ～ 38年　20×28、
18×34、16.5×20等（紙寸）
ペン画　シミ　汚れ
セロテープ折れ
「戦国」と番号が書込
95,000

80　岩田専太郎　挿画『夜のリボン』11図　　65,000
1953年頃　24×27.5、27×34等（紙寸）　サイン　ペン画　ヤケ　シミ　汚れ　折れ等　「りぼん1」「本日大阪送り」等書込

81　上野　誠　25,000
「松本城」 1973年　55.2×38.3
限50　サイン　木版　マージン少シミ　画面左上にシミ
1ヶ所　裏面少シミ

82　上野山清貢「神戸水源地の冬」　80,000
1925年　油彩4号（24×33）　板　サイン　画面少汚れ　元額少汚れ　少傷み

83
梅原龍三郎
「作品」
22.5×16.5
刷込サイン
木版　少シミ
少ヤケ　裏面ヤケ
上辺にテープ跡
2ヶ所
13,000

84　海野光弘「壁影」　70,000
1977年　37.5×53.3　7/100　サイン　木版
少ヤケ　少シミ

85　江藤　哲「花」　35,000
油彩6号（41×32）　キャンバス
サイン

86　太田雅光　35,000
「作品」 41×33（軸寸138×44）　サイン　印　絹本
箱無　軸装傷み・汚れ

87　大西耕三「暮色」　6,000
1977年　35×53　限30　サイン　木版　少シミ
裏面セロテープ跡

88　大西靖子「木版6枚組」　13,000
7×8、11×17、17.5×14.5、15×26他　限50 ～ 200
サイン　木版

89　篠塚雅世 句集『猫の町』　装幀：大野隆司
2015年　角川書店　判型19.4×13.5
①特装版：5,000円
大野隆司木版画1点（6.5×3.5）入　本に肉筆書込5図　限定10部
②普及版：2,700円
大野隆司木版画1点（6.5×3.5）入

90　榎木眞喜
「木版賀状9葉」
1967-1989年　ヤケ
シミ　汚れ
一部縁に折れ
切れ
3,000

91　岡田謙三「果物」　150,000
1936年　油彩6号（26×40）　キャンバス　サイン

92　岡　鹿之助　40,000
「残雪の牧場」　1973年　32×39　サイン
木版　加藤版

93　岡本帰一「夕の街路」　23,000
『現代の洋画』23号より　1914年　13.8×15
木版　少ヤケ　マージンにシミ
左上角少折れ

94　緒方洪章「あじさい」　25,000
5×7.8　サイン　鉛筆デッサン

95　小川千甕「管中仮住」　25,000
24×34　サイン　水彩　大正震災罹災者救護展出陳　薄い裏打　少シミ

96　奥山儀八郎「杓子頂上」　7,000
28×44.5　サイン　木版　少シミ

97　奥山儀八郎「逆さ富士」　4,000
1955年　22×45　木版　少シミ

98　奥山儀八郎「雪の浅間山」　5,000
1954年　22×45.5　サイン　木版

99　奥山儀八郎「金閣寺」　4,000
1955年頃　21.5×45.5　サイン　木版
マージン上部中央に摺りジワ　少シミ

100　小作青史
「銅版賀状4葉」
1971-1989年　サイン
ヤケ　2葉にシミ多
裏面汚れ　剥し跡
3,000

101
大本　靖
「春山の樹」
55×25　限100
サイン　木版
マージン下辺
少折れ
僅かシミ
8,000

102　岡田博至　3,000
「木版賀状6葉」
1971-1984年　ヤケ　シミ
汚れ　1葉裏面に台紙より
の剥し跡

103　尾形月耕「作品」2点組　80,000
各107×42.5（軸寸205×57）　サイン　絹本　双幅
箱書無　少ヤケ　少汚れ　少シワ

104　小野忠重「塩の道　足助」55,000
1980年改刻　22.2×30　限20　サイン
木版　台紙に貼付

105　小野忠弘「裸婦」15,000
30×25　サイン無　パステル

106　小谷松　隆
「作品」
16×20　限250
サイン　木版
4,000

107　甲斐仁代「薔薇」　35,000
1961年　油彩8号（44×32）　キャンバス
サイン　画面6ヶ所剥落有

108　笠松紫浪　65,000
「護国寺鐘楼（雪晴れ）」
昭和8年　36×24　木版　渡辺版
全体に摺りジワ（弱い折れ）有
少ヤケ

109　勝山英三郎
「実朝歴史之内11図」
明治24年　各19×24.5（紙寸）
石版　美術着色会社製造
天地少断ち
10,000

110　金子国義　25,000
「玉の井十二景の内他スケッチブック肉筆画3図」
25×21、28×26、37×34　スケッチブック裏表紙にサイン

111　桂　ユキ　30,000
「アダムとイブ」 46×35.5
限32　サイン　リトグラフ
マットヤケ　裏面ヤケ

112　角　浩　70,000
「樹馬（ブラジリヤの幻想）」
1966年　油彩3号（27×22）
キャンバス　サイン
額下部に1ヶ所傷み

113　加山又造「白衣の裸婦」　75,000
1987年　13×19.3　限95　サイン　銅版

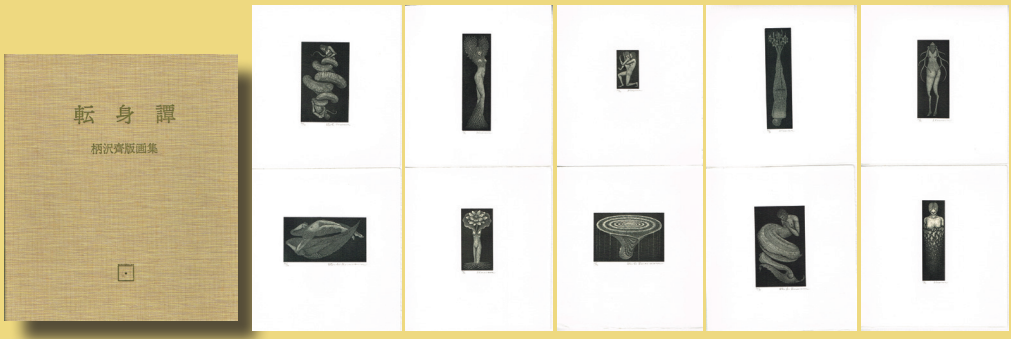
114　紙屋清貴　10,000
「小さなトルソー」
高13　巾6.7×5　刻名
テラコッタ　箱無

115　紙屋清貴　20,000
「うずくまる女」
高5　巾17×6　刻名　テラコッタ　箱無

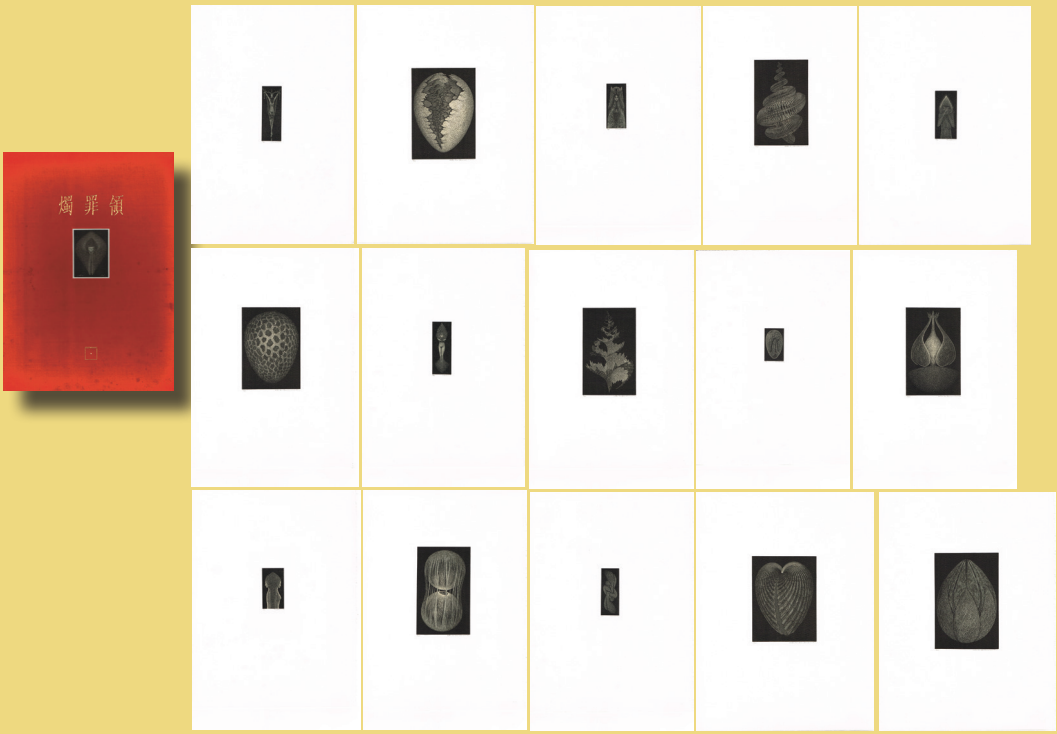
116　紙屋清貴　15,000
「後ろ姿のレリーフ」
高19.5×横9.5　厚み4　刻名
テラコッタ　箱無

117　蒲地青爾
「銅版賀状8葉」
1973-1989年　少ヤケ
少シミ　1葉にシミ大
4,000

118　柄澤　齊　木口木版画集『Al - Chimija　8つの木口木版のための8つの錬金術的寓意』　380,000
1972年　判型29.5×22　EP　サイン　オリジナル木口木版8図入　函と前書き頁にシミ



119　柄澤　齊　版画集『転身譚』　110,000
1977年　シロタ画廊　判型21×19　限70　サイン　木口木版10図入
表紙と奥付頁等にシミ　版画は良好



120　柄澤　齊　版画集『燭罪領』〈七つの大罪〉による　250,000
1975年　シロタ画廊　判型41×31　限55　サイン　木口木版15図入　外箱少汚れ　元タトウ少汚れ
本文少シミ

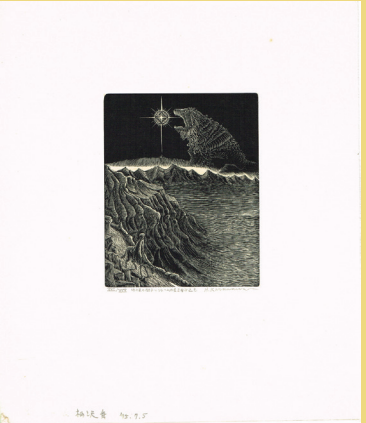
121　柄澤　齊『雅歌』　55,000
1985年　湯川書房　判型19×13　限70　木口木版8図入
表・裏表紙汚れ　本文少シミ

122　鶴岡善久 句集『鏡狩り』　23,000
昭和52年　沖積舎　判型24×15　限25　サイン　柄澤齊木口木版1図入
鶴岡善久自筆32句入　箱・表紙・裏表紙にシミ

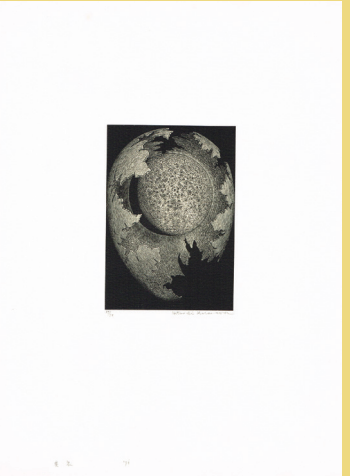
123　柄澤　齊「禁断の果実」45,000
『Al-ChimijaⅡ』より　1972年　10.5×13
限XXX　サイン　木口木版
少ヤケ・少シミ

124　柄澤　齊　23,000
「息を吹き込むケルゼム」
『Al-Chimija』より　1972年　6×11.3
限XXX　サイン　木口木版　雁皮刷
マージン少ヤケ・シミ

125　柄澤　齊　45,000
「男の手に慄くダフネ」
『Al-Chimija』より　1972年　11.5×11.5
木口木版　少ヤケ

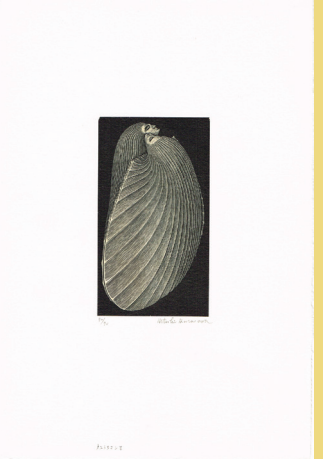


126　柄澤　齊　40,000
「地の果の獅子ベツレヘムの星を呑み込む」
『Al-Chimija』より　1972年　13×10.5
サイン　木口木版　マージン2ヶ所シミ
台紙下辺に「柄沢斉　75.7.5」の鉛筆書有り

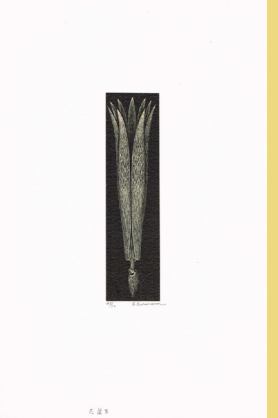


127　柄澤　齊「黄泉　I」
1976年　14.5×10　限50　サイン
木口木版　マージンややヤケ
シミ
35,000

128　柄澤　齊　35,000
「漂流物　Ⅰ」
1977年　15.2×10.3　限50　サイン
木口木版　マージン右辺少シミ

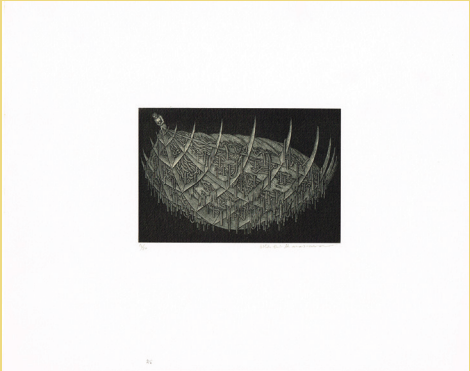


129　柄澤　齊　25,000
「オストラコンⅡ」
1977年　12×6.7　限70　サイン
木口木版

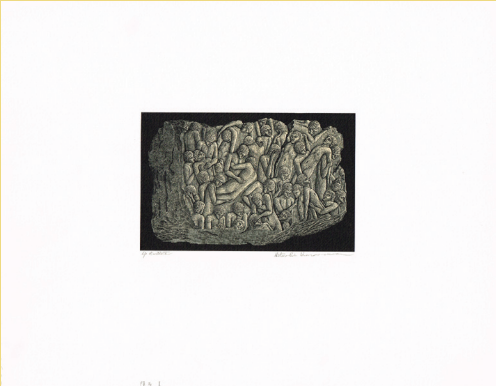


130　柄澤　齊　18,000
「花筐　Ⅱ」
1977年　11.5×3　限50　サイン
木口木版　少ヤケ

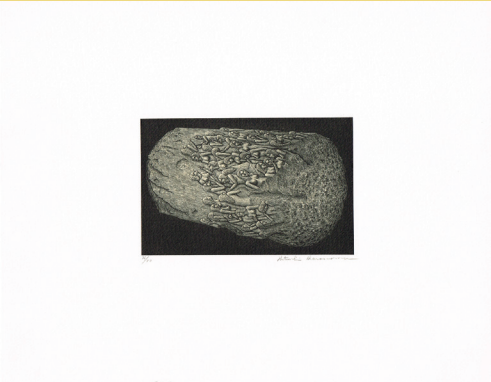
131　柄澤　齊「ヴァチカン」　30,000
1977年　10×14.8　限50　サイン　木口木版
マージン少シミ　少汚れ



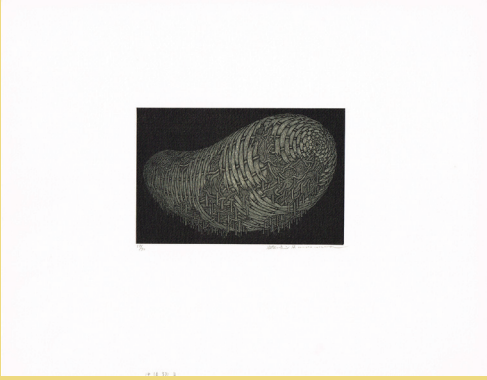
132　柄澤　齊「船」　35,000
1977年　10×15　限50　サイン　木口木版
マージンに僅かシミ



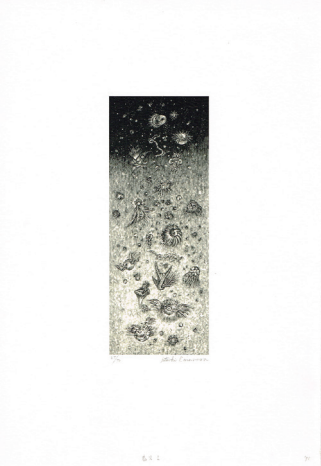
133　柄澤　齊「隕石　I」　35,000
1977年　10×15　E.A　サイン　木口木版
マージンにシミ



134　柄澤　齊「隕石　II」　35,000
1977年　9.7×15　限50　サイン　木口木版
左下角僅かに折れ



135　柄澤　齊「漂流物　II」　35,000
1977年　10×15　限50　サイン　木口木版
マージン少シミ

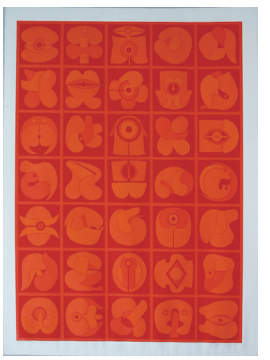


136　柄澤　齊　25,000
「鬼灯　I」　1980年　13.7×5.2
限70　サイン　木口木版

137　河越虎之進「作品一括」　100,000
油彩画9点（0号大～6号大、キャンバス6点、板3点、内1点破れ）　水彩色紙6点、短冊3点、デッサン18点（16×23、20×29他）まくり8点（134×35、66×34他）

138　川上澄生　20,000
「的」
『川上澄生版画集』表紙絵
以土帖印社　15×11.7　木版
マージンシミ　摺りジワ
左辺にメモ書き

139　川島　猛　20,000
「J・T・H　No.4」
66.5×45.5　AP　サイン
シルクスクリーン　マットヤケ



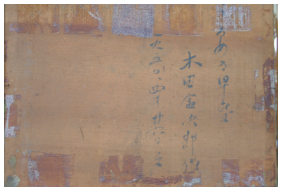
140　川島　猛　20,000
「作品」　69.5×50.5　限90
サイン　シルクスクリーン
マージン少ヤケ・少シミ

141　川西　英　40,000
「神戸港」　33×24　木版　共額
シール付　少ヤケ　少褪色

142　神原　泰「Ode á Picasso」　165,000
1972年　油彩4号（23×33）　サイン　キャンバス　画面少汚れ　元函傷み

143　川面義雄（莱山）　10,000
「地引網」 25.2×37　刷込サイン　木版

144　川面義雄（莱山）
「玉姫神社」 37×24
刷込サイン　木版　少シミ
裏面少ヤケ
8,000



145　木田金次郎「早春」　500,000
1950年　油彩4号（23×33）板　油彩　裏面にサインと年代とタイトル　少汚れ
裏面テープ剥し跡

146　木下富雄「木版賀状6葉」4,000
1968-1976年　ヤケ　シミ　一部に折れ

147　城所　祥「銅版賀状8葉」　4,000
1969-1986年　ヤケ　シミ　裏面一部に台紙からの剥し跡　破れ

148　北岡文雄
「木版賀状4葉」
1972-1981年　少ヤケ
少シミ　裏面1葉に
台紙からの剥し跡
4,000

149　木村希八
「リトグラフ賀状3葉」
1980-1988年　ヤケ
シミ
3,000

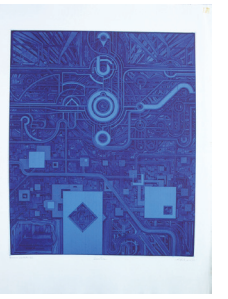
150　木村辰彦「銚子」　25,000
油彩3号（22×27）キャンバス　サイン　画面少汚れ
元額少汚れ

151　木原康行
「Retoucher 1」
1977年　13.2×10
限100　サイン
銅版
3,000

152　木原康行
「Retoucher 2」
1977年　13.2×10
限100　サイン
銅版
3,000

153　木原康行　15,000
「3つの球体」　48×34　EA
サイン　銅版　少マットヤケ
裏面少ヤケ　テープ跡

154　木原康行　20,000
「Deplacement」
54.5×44　限30　サイン
銅版　少シワ



155　木原康行　20,000
「Ossature」　1973年
57.5×47.5　EA1/5
サイン　銅版
マージン少シミ
右上角にセロテープ跡

156　菊池伶司
「Alligator Message」
1968年作（死後刷）
42×36　1/20　スタンプ印　銅版
第36回日本版画協会展新人賞受賞
65,000

157　黒崎　彰　5,000
「W - H35」　1992年　21×20
限150　サイン　木版

158　栗原喜依子
「帽子の裸婦」（仮）
47×38　限150　サイン
リトグラフ　マージン
上辺に少シミ　裏面少シミ
13,000

159　倉田白羊「風景（小笠原？）」　165,000
1913年　24×32.5　サイン　水彩　少ヤケ　裏面板ヤケ

160　栗原　信「北欧早春（ブルージュ）」　90,000
油彩12号（51×64）　キャンバス　サイン
画面上部に割れ　元額汚れ・傷み　全体に保存やや不良

161　栗原忠二「風景」　150,000
38×51　サイン　水彩　少シワ

162　栗原忠二「風景　リッチモンドブリッジ」　165,000
44×62　サイン　水彩　少ヤケ

163　合田小三郎「玉葱」
油彩8号（34×46）　キャンバス　サイン
画面少汚れ　額傷み　旧松方コレクション品
20,000

164　古城江観「独逸ワンゼー風景」　25,000
『世界風景及び風俗版画第一輯の六』より　1931年　スケッチ
24.2×60.3　限150　木版　解説文付　全体にヤケ
マージン汚れ

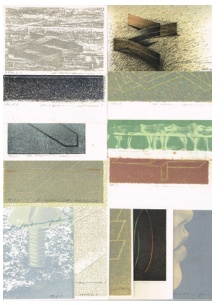
165　古城江観「伊太利羅馬の秋」　25,000
『世界風景及び風俗版画第一輯』より　1929年　スケッチ
24×60　限150　木版　解説文付　マージン汚れ

166　古城江観「印度　ヴェナレス」　25,000
『世界風景及び風俗版画第一輯』より　1930年頃　24×60
限150　木版　解説文付　全体に少ヤケ

167　古城江観「香港風景」　25,000
『世界風景及び風俗版画第一輯』より　1930年頃　24×60
限150　木版　解説文付　全体にヤケ

168　小西誠一郎　6,000
「奈良　飛火野風景」
28.3×36　限107　サイン　木版
マージンヤケ

169　小西誠一郎　10,000
「赤富士　三ツ峠より」
1981年　37.5×49.5　限30　サイン
木版　マージンヤケ



170　小林清子　5,000
「木版賀状15葉」
1974-1989年　少ヤケ
一部に少剥がし跡

171　小林ドンゲ　8,000
「作品」　22.5×18　限100
マージンシミ　少ヤケ

172　小林ドンゲ　銅版画集『サロメ　火の処女』　50,000
1976年　プリントアートセンター　判型49.5×37　限75　各サイン　銅版6図入　元タトウ　外函傷

173　後藤純男「月」　35,000
14×11　限200　印　リトグラフ

174　小村雪岱
「もみじ」
30×21　木版
保存不良
少ヤケ・シミ
折れジワ多数
右端と左上下に切れ
裏面ヤケ　上辺テープ
25,000

175　駒井哲郎「二樹」75,000
1970年　23.5×16.5　限200
サイン　木版　少ヤケ　テープ跡

176　駒井哲郎「化石」　270,000
1960年　EA　サイン　銅版　裏面ヤケ修復

177　駒井哲郎「樹木」　150,000
1957年　18×27　EA　サイン　銅版　全体に少ヤケ
弱いマットヤケ

178　斉藤カオル「紅」　10,000
1984年　17.5×20.5　限93　サイン
銅版

179　斉藤カオル　7,000
「桃花粧」 1985年　18×14.5
限93　サイン　銅版

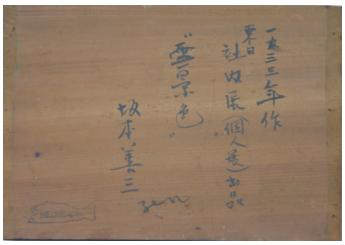
180　斉藤カオル　6,000
「細い飾り」 1974年
26.2×21.5　AP　サイン
銅版

181　斉藤カオル　6,000
「風（その足もとに）」
1975年　26.5×21.5　AP
サイン　銅版

182　斉藤カオル　5,000
「小さなものの風景」
1977年　23.2×19.5　限50
サイン　銅版

183　サイトウ良「版画賀状14葉」　4,000
1974-1989年　サイン　シルクスクリーン　少シミ

184　坂本好一　4,000
「版画賀状10葉」 1971-1989年
木版9葉　銅版1葉　内2葉シミ多
他少シミ



185　坂本善三「雪景色」　120,000
1933年　油彩SM（15.5×23）　板　サイン
左辺と右辺の中央に小穴有

186　斉藤　清　70,000
「BUDDHA（3）」 1962年　53×38.5
限200　サイン　木版　マージン少シミ
少ヤケ

187　沢田哲郎「作品」　30,000
1960年　油彩SM（16×23）　キャンバス
サイン　画面少割れ　少汚れ

188　沢田哲郎「作品」　35,000
1960年　油彩SM（16×23）　キャンバス
サイン　少汚れ

189
佐藤暢男
「版画賀状4葉」
1967-1972年
サイン
3葉銅版
1葉版種不明
3,000

190
佐藤　宏
「木版賀状5葉」
1971-1978年
少シミ
3,000

191　更科　秀「銅版賀状13葉」　4,000
1971-1989年　少シミ

192　里見勝蔵「ザクロ」　280,000
昭和7年　油彩3号（22×27）　板　サイン　日本洋画商協同組合鑑定書付　画面少汚れ

193　桜井　悦　50,000
「バルセロナの教会」
1955年　油彩6号（40×31）　サイン
キャンバス

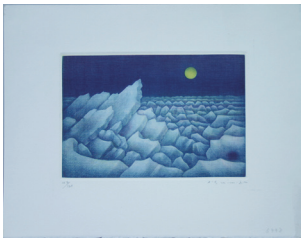
194　澤田政廣　10,000
「裸婦」
『彫刻家のアトリエから』
より　62×43　限75
サイン　リトグラフ
マージン下辺に少シミ
裏面少シミ

195　澤田政廣　石版画集『彫刻家のアトリエから』　80,000
昭和42年　明治書房　判型71×51　限75　サイン　リトグラフ　目次と解説頁シミ
作品少シミ

196　志　宏　20,000
「於印度鹿野苑」
仏紀二千五百年夏　36×43
サイン　絹本に水彩　額に貼込
額傷み

197　清水練徳　40,000
「神宮の菖蒲」　油彩6号（31×41）
キャンバス　サイン

198　鈴木幹二「木版賀状16葉」4,000
1971-1989年　少汚れ　少シミ



199　清水　敦「作品」　10,000
13.3×20　限120　サイン　銅版
マージン右辺下少汚れ

200　清水　敦　4,000
「Lake Abashiri」
8×13.5　限250　サイン　銅版

201　神保朋世　35,000
「あたたか」　昭和56年
41×27　木版　大倉半兵衛彫
関岡扇会摺　顔の部分にシミ
数ヶ所

202　神保朋世　40,000
「静夜」　昭和55年
41.7×27.3　木版
大倉半兵衛彫　関岡扇会摺
顔の部分にシミ数ヶ所

203　鈴木保徳「騎馬」　9,000
28×36　サイン　紙に水彩　少ヤケ
裏面ヤケ

204　杉沢　修『杉沢　修　蔵書票集』　5,000
平成6年　画楽舎　判型19.7×16.3　作品紙寸7.1×8　9×7他
限20　サイン　刷込サイン　印　木版　蔵書票20図入
本文台紙に少シミ　作品はほぼ良好　カバー付

205　菅野惠介「静物」　300,000
油彩6号（31×40）　サイン　キャンバスボード

206　鈴木金平「海岸風景」　70,000
1935年　油彩12号（44×52）　キャンバス
サイン　裏面に年代

207　鈴木準中「書票」1
昭和59年10月　判型17×16
限50　孔版10図入
3,000

208　鈴木準中「書票抄」2　3,000
昭和60年1月　判型17×17　限30　孔版10図入

209　鈴木準中「書票抄」3　3,000
昭和60年2月　判型17×17　限30　孔版10図入

210　鈴木準中「書票抄」4　3,000
昭和60年3月　判型17×17　限30　孔版10図入

211　鈴木準中「書票抄」5　3,000
昭和60年1月　判型17×17　限20　孔版10図入

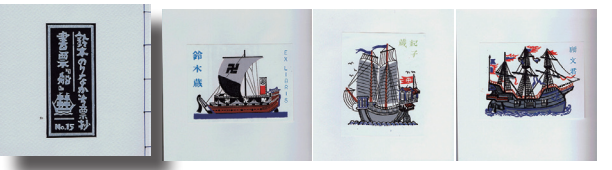
212　鈴木準中「書票抄」6　3,000
昭和60年10月　判型17×17　限25　孔版10図入

213　鈴木準中「書票抄」7　3,000
昭和60年10月　判型17×17　限25　孔版10図入

214　鈴木準中「書票抄」8　3,000
昭和60年10月　判型17×17　限30　孔版10図入

215　鈴木準中「書票抄」9　3,000
昭和60年10月　判型17×17　限30　孔版10図入

216　鈴木準中「書票抄」10　3,000
昭和60年10月　判型17×17　限30　孔版10図入



217　鈴木準中「書票抄」15（船）　3,000
1987年1月　判型17×17　限20　孔版10図入　少シミ

218　鈴木準中「書票抄」16（こけし）　3,000
1988年12月　判型17×17　限8　孔版10図入　少シミ

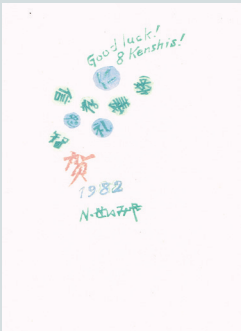
219　鈴木準中「十二支書票集」　3,000
1986年10月　判型17×17　限7　孔版12図入

220　清宮質文　15,000
「1967年木版賀状」
刷込サイン　木版　ヤケ

221　清宮質文　15,000
「1969年木版賀状」
刷込サイン　木版　少ヤケ
少シミ　裏面裏打剥し跡

222　清宮質文　20,000
「1972年木版賀状」
刷込サイン　木版

223　清宮質文　20,000
「1981年木版賀状」
刷込サイン　木版
ややヤケ



224　清宮質文　15,000
「1982年木版賀状」
刷込サイン　木版

225　清宮質文　20,000
「1984年木版賀状」
刷込サイン　木版　ヤケ

226　清宮質文　10,000
「1984年木版賀状」
刷込サイン　木版　少ヤケ

227　清宮質文　15,000
「1986年木版賀状」
刷込サイン　僅かにシミ

228　清宮質文　15,000
「1988年木版賀状」
刷込サイン

229　清宮　彬「木版賀状1葉」
棟方志功への賀状　ヤケ　シミ

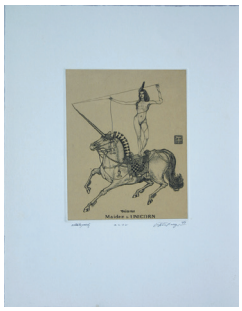
10,000

230　関野準一郎　3,000
「木版絵葉書5葉組」　昭和26年頃
少ヤケ　僅かにシミ

231　関野準一郎「猫二匹」　20,000
36×45　印　木版　保存不良　ヤケ　折れ
マージンピン穴

232　曽宮一念「風景」　13,000
18.5×24.5　刷込サイン
裏面にサイン　コロタイプに手彩入
中折れ

233　多賀　新
「ユニコーン」
1989年　17.5×14.5
AP　サイン　銅版
マージン少シミ
5,000



234　高橋幸子　1,000
「こころのわらべ唄　2016年　平成28年　CALENDAR」 21×29.6

235　高橋幸子「麦」　12,000
10.6×16.2　AP　サイン　木版　裏打

236　高橋幸子
「おち葉たき」
10.9×16　限100
木版　裏打
10,000

239　高橋幸子「秋冷」　12,000
11.3×13.5　限100　サイン　木版　裏打

237　高橋幸子
「水仙」
10.2×16.2　AP
サイン　木版
裏打
10,000

240　高橋幸子「ぶどうの季節」　12,000
10.7×15　限100　サイン　木版　裏打

238　高橋幸子
「もちつき」
10.9×15.6　限100
サイン　木版
裏打
10,000

No.241 ～ 245　高橋幸子　読売新聞日曜版「歌壇俳壇」欄（1997年～ 2003年）に掲載された「野の草花シリーズ」 各9.5×7
紙寸各17.8×12.5　限100　サイン　木版　裏打　各7,000

241　「炎花」（やいとばな）

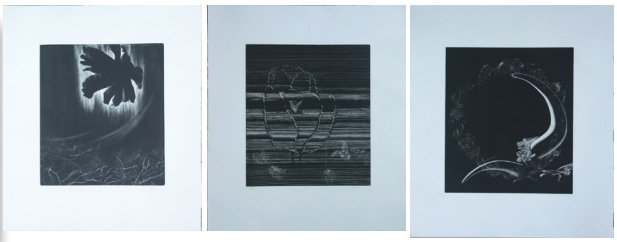
242　「蕺草」（どくだみ）

243　「野葡萄」（のぶどう）

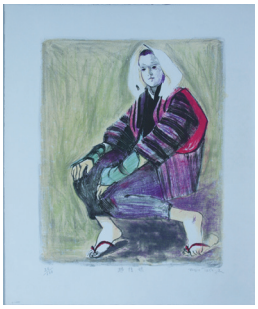
244　「侘助」（わびすけ）

245　「たんぽぽ」

246　武井武雄「木版小品5点組」6,000
10×15.5　8.2×6.5等　少ヤケ
僅かにシミ　2点は同じ図柄



247　竹田和子　銅版画集『12宮の星座』　60,000
1975年　ヤノアート　判型61×53.5　限100　サイン　銅版12図入（35.5×31ほか）　元タトウ　作品のマージンに僅かシミ　解説頁と奥付頁にシミ　外函傷み



248　竹谷富士雄　5,000
「越後娘」 43×35　限100
サイン　リトグラフ　少シミ

249　田村文雄「銅版賀状8葉」　3,000
1972-1989年　少シミ

250　田村文雄
オリジナルリトグラフ版画集『夢想記 - 戯れのセレモニー -』
1975年　シロタ画廊　判型20×19　限35　サイン
リトグラフ10図入　全体にシミ　リトグラフは良好
20,000

251　玉村方久斗　8,000
「水彩色紙」 27×24　サイン
絹本？　少ヤケ

252　谷中安規「泥と雪」　50,000
『版藝術』第11号　1933年　11×20　木版　画面ヤケ
台紙シミ

253　谷中安規　65,000
「射手」
『浮世絵芸術』12巻11号
1933年12月　16×10.8　木版
少ヤケ　少シミ

254　辰野登恵子　30,000
「Sept - 15 - 2004」
2004年　18.5×22　限38　サイン　銅版

255　田中　保「花」
油彩15号（65×53）　キャンバス
サイン　画面中央下部に破れ
全体に少割れ　傷み修復有
250,000

256　鳥海青児「家並」
油彩8号（46×38）　キャンバス
サイン　東京美術倶楽部鑑定証付
額無　画面傷み修復有
550,000

257　鳥海青児「アルゼリー広場」　**750,000**
油彩6号（32×40.5）　キャンバス　サイン　東京美術倶楽部鑑定証付

258　鳥海青児「フロレンス」70,000
29×23　サイン　紙に鉛筆とパステル
裏面にタイトルとサイン　台紙ヤケ
元額傷み

259　佃　政道「作品」　5,000
24×39　サイン無　木版
マージン少汚れ　右辺に切れ1ヶ所
裏面テープ剥し跡3ヶ所

260　佃　政道「作品」　6,000
26.5×39　印　木版　マージン少汚れ
下辺部に折れ・シワ　裏面裏打剥し跡

261　佃　政道「用明天皇陵」　6,000
25×39　印　木版　マージン僅かに汚れ
僅かに折れ・シワ

262　佃　政道「邑地　1」　5,000
27×39　サイン無　印　木版　シミ
少汚れ　台紙に貼付

263　佃　政道「作品」　6,000
28×38.5　印　木版　マージン少シミ
裏面裏打剥し跡

264　佃　政道「孝元天皇陵」　12,000
27.3×39.2　印　木版　摺りジワ　少シミ
マージン少汚れ・シミ

265　佃　政道「吉隠」　7,000
27×38.3　印　木版　マージンに少汚れ
摺りジワ　左下角に折れ
裏面上辺セロテープ2ヶ所

266　佃　政道「秋篠寺本堂」　7,000
26×40　サイン　木版　やや汚れ　裏打

267　佃　政道「作品」　6,000
27×39　印　木版　やや汚れ
右マージンに少切れ　裏面切れ　剥し跡
紙貼付

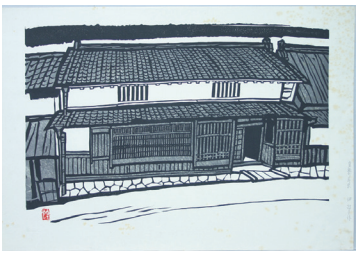
268　佃　政道　**7,000**
「大蔵寺　本堂」24.5×38.5　印　木版
少汚れ　左下角に剥し跡　裏打

269　佃　政道「転害門」　6,000
24.5×39　印　木版　マージンにややシワ

270　佃　政道「唐招提寺金堂」6,000
39.2×27　印　木版　全体にシミと少シワ

271　佃　政道　6,000
「右上神宮摂社出雲建現神社殿」
27×39　印　木版　マージン左上辺にシワ

272　佃　政道「高野山不動堂」8,000
27.5×39　印　木版　少シミ　マージンシミ



273　佃　政道「高取町民家」　6,000
26×40　印　木版　マージンにシミ
少シミ

274　佃　政道「耳成山」　12,000
27.3×39　印　木版　摺りジワ
マージン少汚れ

275　佃　政道「天香久山」　12,000
27.3×37.5　印　木版
マージン四角にへこみ（あたり）
マージン汚れ

276　戸張孤雁「鏡の前」　350,000
制作年不詳　38.5×26.5　木版　孤雁新東錦絵会刊
全体にヤケ・シミ　裏面ヤケ

277　土橋　淳「作品」　25,000
16.5×20.5　サイン　油彩にコラージュ　板　額無

278　中川伊作「踊り」　20,000
42×56　印　木版　少シワ
マージン右辺下に少汚れ

279　中澤弘光　30,000
「木版挿絵30枚組」
1903-1905年等　14×7、
17.5×13、9.2×9.4等
刷込サイン　ヤケ　汚れ
折れ　褪色　一部切れ等
保存不良　裏面剥し跡等

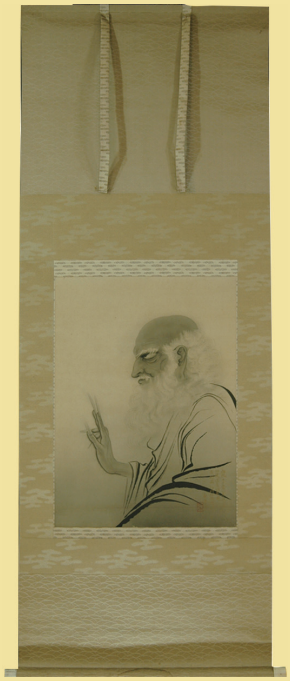
280　中尾義隆　10,000
「磐梯山」　1980年　30×41
EP　サイン　木版

281　中尾義隆　8,000
「四国カルスト」　1981年
24×33　EP　サイン　木版
画面上部に僅かスレ

282　長野草風　30,000
「却火の都」　30×42　サイン
水彩　大正震災罹災者救護展出陳
薄い裏打　少シミ

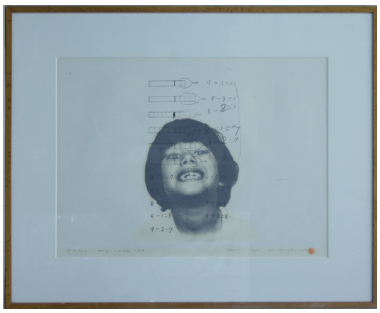
283　西山英雄　13,000
「桜島」　53×40　限100
サイン　リトグラフ
裏面少ヤケ　少シミ

284　中本達也「春」　8,000
11×18.5　EP　銅版
スタンプサイン少ヤケ
裏面テープ跡



285　野生司香雪　120,000
「印度婆羅那斯図」
佛紀二千五百一年秋八月　58×41
（軸寸157×57.5）　サイン　絹本
軸汚れ　箱書無

286　野生司香雪　50,000
「草叢」　昭和30年夏
112.5×41.5（軸寸180×55.5）
サイン　印　絹本　共箱
少シミ　少汚れ



287　野田哲也　50,000
「Diary　August　10,　1979」　1979年
35×50.5　限30　サイン　木版とシルク併用
少ヤケ

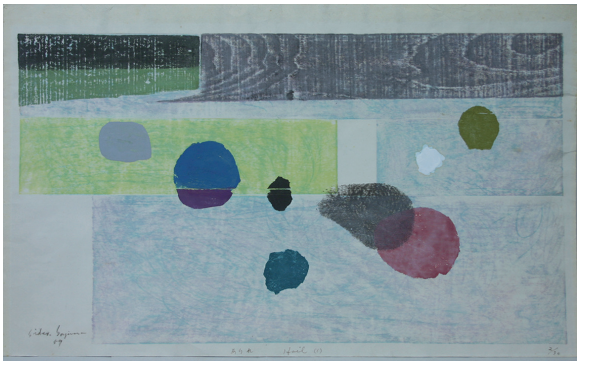
288　野田弘志　25,000
「ワインとグラス」　21×31　限50
サイン　リトグラフ

289　野田弘志「バラ」　25,000
22×18　B.A.T　サイン　銅版

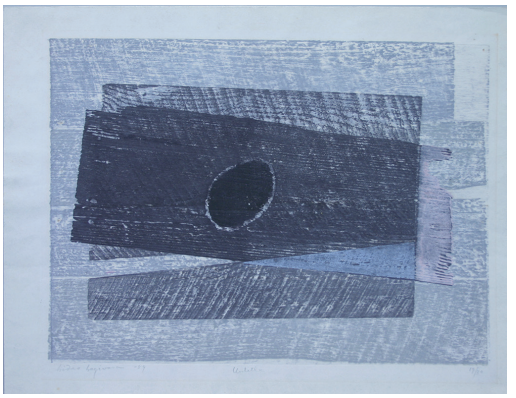
290　萩原英雄『イソップ寓話銅版画集』　25,000
1957年　各12×16.5　判型40×31　限50　サイン　銅版5図入　少シミ
元帙少シミ　表紙上部に破れ有

291　萩原英雄「悲しきピエロ」　25,000
1955年　35×25.5　限30　サイン　木版
少シワ

292　萩原英雄「春を待つ」　50,000
1985年　57.5×42　限100　サイン　木版
マージン少ヤケ



293　萩原英雄「あられ　Heil（1）」　60,000
1959年　37.5×67　限30　サイン　木版　少ヤケ　少シミ
右辺にシワ



294　萩原英雄「Untitled」　30,000
1959年　34.5×48　限30　サイン　木版　少マットヤケ
少シミ　少シワ

295　萩原英雄
「極光」
1959年　66.5×38
限30　サイン
木版　マージン下
辺に少シワ・
少傷み　少シミ
50,000

296　萩原英雄「悪の華　仇花」　100,000
1960年　58×40.5　限30　サイン　木版

297　萩原英雄「虚」　50,000
1958年　69×45.5　限30　サイン　木版
マージン少傷み　全体にシワと少折れ

298　萩原英雄「貴婦人　No.9」　40,000
1975年　38×54　限50　サイン　木版
マージン少ヤケ

299　萩原英雄「貴婦人　No.10」　45,000
1975年　38×54　限50　サイン　木版　少マットヤケ
マージンシワ

300　萩原英雄「貴婦人　No.12」　45,000
1975年　38×54　限50　サイン　木版　少マットヤケ

301　萩原英雄「貴婦人　No.13」　45,000
1975年　38×54　限50　サイン　木版　マットヤケ
裏面テープ跡

No.302 ～ 337　萩原英雄　『三十六富士』　シリーズ　1981年～ 1986年　35×47，47×35　木版　a.p.

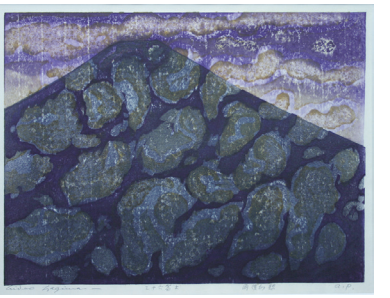
302　No.1「高速終点近し」　35,000

303　No.2「夏草夏雲」　50,000
マージン左下少シミ・シワ

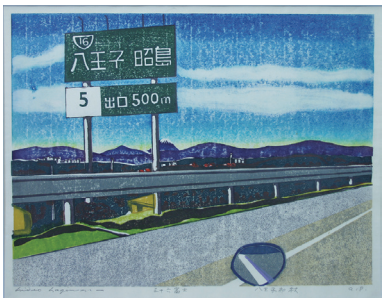
304　No.3「二合目快晴」　45,000

305 No.4「名残りの花」　50,000

306　No.5「忍野への途」　50,000



307　No.6「雨後幻想」　50,000



308　No.7「八王子初秋」　25,000

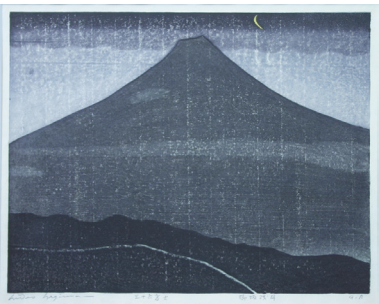
309　No.8「暮れ残る」　50,000

310　No.9「十里木秋雲」　45,000

311　No.10「山中湖暁雲」　50,000

312　No.11「空燃える」　45,000

313　No.12「お山は小焼」　50,000



314　No.13「御坂残月」　50,000

315　No.14「すそ野秋風」　50,000

316　No.15「薄晴れ」　45,000

317　No.16「朝霧野焼」　45,000

318　No.17「県境錦秋」　50,000

319　No.18「河口湖黄昏」　40,000

320　No.19「みのりの時」　35,000

321　No.20「煤煙の彼方に」　25,000

322　No.21「雲遊ぶ」　40,000

323　No.22「煙立つ」　35,000

324　No.23「御殿場初冬」　45,000

325　No.24「みぞれ来る」　50,000

326　No.25「木枯らし来る日」　50,000

327　No.26「小春日和」　35,000

328　No.27「石和早春」　80,000

329　No.28「伊豆雪煙」　65,000

330　No.29「山 又 山」　40,000

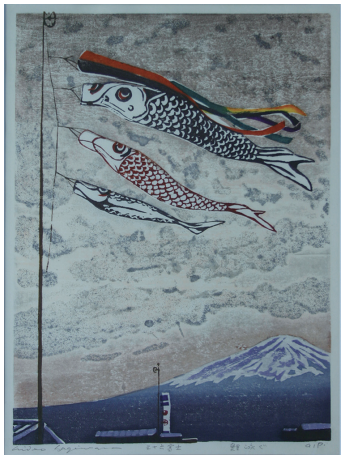
331　No.30「笛吹川余情」　40,000

332　No.31「明と暗と」　35,000

333　No.32「篭坂慕情」　40,000

334　No.33「花霞」　40,000

335　No.34「春日遅々」　45,000



336　No.35「鯉泳ぐ」　40,000

337　No.36「ビルの谷間に」35,000

338　橋口五葉「神戸之宵月」　75,000
大正9年　28×44.5　木版　少ヤケ　マージン左下角切れ
裏打

339　日夏耿之介詩集『轉身の頌』　35,000
大正6年　光風館書店　判型21×20　長谷川潔の装丁・挿図
日夏耿之介署名入　長谷川潔木版蔵書票入　函汚れ　本文ヤケ
テープ跡　ケース変色　シミ　擦り切れ　書入れ

340　長谷川　潔
「サン・ポール・デュ・ヴァール」
1920年代頃　46×61　スタンプサイン
パステル画　少ヤケ　画面左下角に汚れ
350,000

341　土野　進
「新緑」
油彩SM（23×15）　サイン
キャンバス
40,000

342　長谷川　潔
「水から上る水浴の女」
1925年作　14.9×10.1
刷込サイン　銅版　限定/サイン無
マージン少ヤケ　裏面少ヤケ
少シミ
80,000

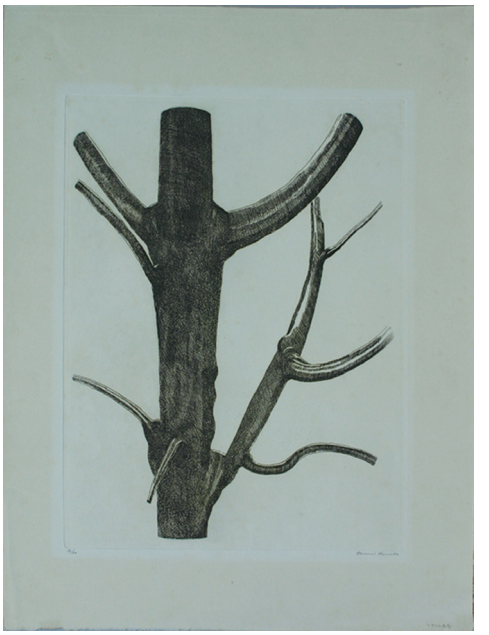
343　浜田知明「初年兵哀歌」　450,000
1952年　22×14　限20　サイン　銅版　裏面中央に少ヤケ

344　浜田知明「首」　120,000
1951年　15×14　限50　サイン　銅版　全体に少ヤケ
マットヤケ　裏面四角にテープ跡

345　浜田知明「いらいら（A）」　250,000
1974年　35.2×24　限50　サイン　銅版　マージン少ヤケ

346　浜田知明「いらいら（B）」　300,000
1975年　35.5×27　限50　サイン　銅版

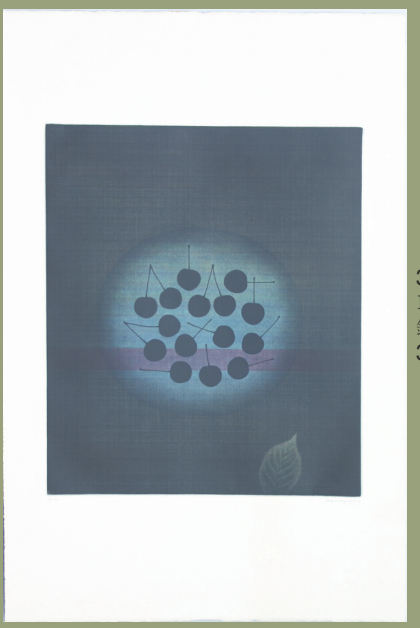
347　浜田知明「地方名士」　130,000
1958年　35.5×12.5　限100　サイン　銅版
ヤケ修復有



348　浜田知明
「青桐」
1952年　36.4×27
限20　サイン　銅版
少マットヤケ　少シミ
裏面テープ跡
165,000

349　馬場椙男　4,000
「西の湖秋色」1984年　24.5×35
リトグラフ　マージン少ヤケ
裏面テープ跡

350　浜地清松
「花」
油彩10号（51×43）
キャンバス　サイン
画面汚れ　下部に数ヶ所剥落有
50,000



351　浜口陽三「黒いさくらんぼ」
1963年　34.4×29.4　限50　サイン
銅版　マージン少ヤケ　裏面ヤケ
380,000

352　原　勝四郎「静物」　50,000
10×8　板　原勝四郎画集刊行会シール付

353　日向　裕　30,000
「Saint Paul」
1958年　油彩10号（53×46）　キャンバス
サイン

354　稗田一穂　10,000
「双鶴」 40×31　限100
イニシャルサインと印
リトグラフ　マージンに少シミ
裏面テープ剥し跡他

355　稗田一穂「叢光」　150,000
日本画10号（42×54.5）　サイン　共シール

356　平塚運一「雨の羅漢寺」70,000
1935年　35×29　サイン　木版
僅かシミ　少シワ　マージン上辺少ヤケ

357　平川清蔵『小品版画集』　300,000
1932年　判型34×28　版画7.2×5、12×14.5、9.7×7等　限20　木口木版8図入　全図マットカバー付
一部にシミ　表紙保存不良　元タトウ傷み・破れ

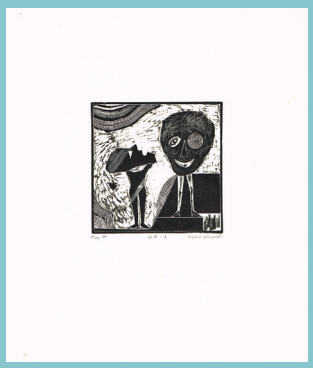
358　詩画集『卵』
詩・嶋岡　晨／版画・日和崎尊夫
1970年　シロタ画廊　判型44×35.5
限50　サイン　木口木版全8図入
外函少ヤケ　元タトウシミ
本文少ヤケ・少シミ
600,000

359　日和崎尊夫版画作品集『薔薇刑』　170,000
昭和45年　美術出版社版画友の会　判型26×23　EP8（限100　EP10の内）
サイン　木口木版12図入　少ヤケ　タトウ少汚れ

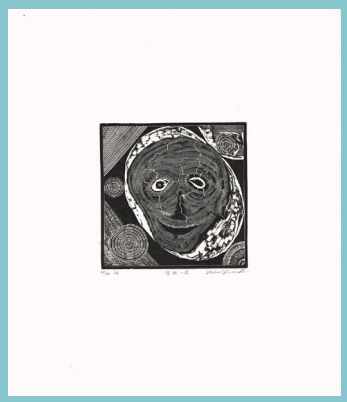
360　詩画集『婚礼』　12,000
詩・西　一知/画・日和崎尊夫
昭和51年　沖積舎　判型24.5×16.5
限170　サイン　木口木版1図入
ケース変色・シミ　背綴じ部剥がれ

361　日和崎尊夫　50,000
「窓と鏡 - B」 1966年
15.3×15.3　限50　サイン
木口木版

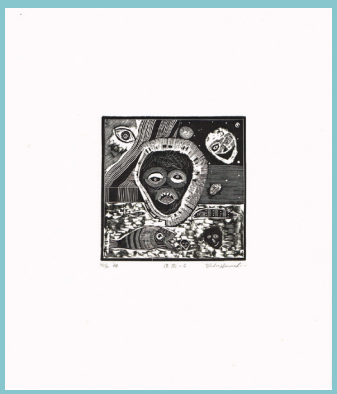
362　日和崎尊夫　55,000
「星の幻想」 1965年　16.8×14.5
限50　サイン　木口木版



363　日和崎尊夫　45,000
「仮面 - A」 1966年　10×10
限50　サイン　木口木版
僅かにシミ



364　日和崎尊夫　45,000
「仮面 - B」 1966年　10.2×10.2
限50　サイン　木口木版



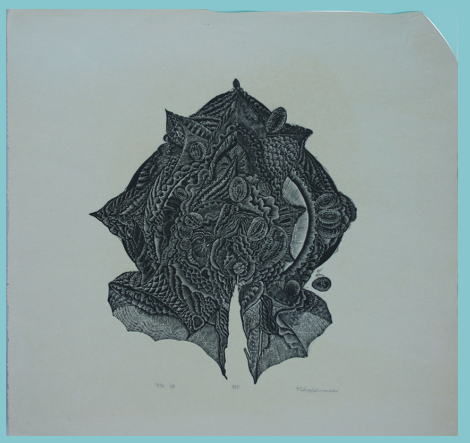
365　日和崎尊夫　40,000
「仮面 - C」 1966年　10.2×10.2
限50　サイン　木口木版

366　日和崎尊夫「一幕」60,000
1967年　19×8.7　限50　サイン
木口木版

367　日和崎尊夫　35,000
「KALPA - 芽」 1968年
10×10.8　E.A　サイン
木口木版

368　日和崎尊夫　35,000
「KALPA - 海」 1968年　9.8×10
E.A　サイン　木口木版

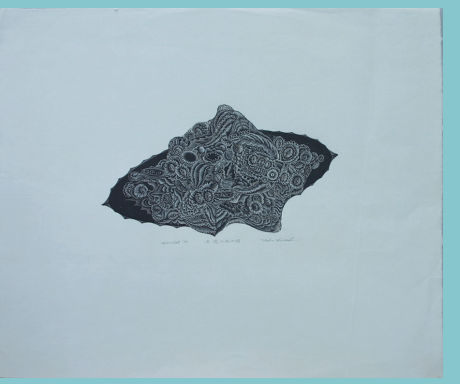
369　日和崎尊夫　50,000
「KALPA - 沼」 1968年　13.5×13.5
E.A　サイン　木口木版



370　日和崎尊夫「脚」　90,000
1969年　23×20.3　限50　サイン　木口木版　少ヤケ
右上角紙漉き時の折れ

371　日和崎尊夫「KALPA - X」　250,000
1969年　25×22.3　EA　サイン　木口木版
少ヤケ　裏面テープ剥し跡
※1969年フィレンツエ国際版画ビエンナーレ
展金賞受賞作品

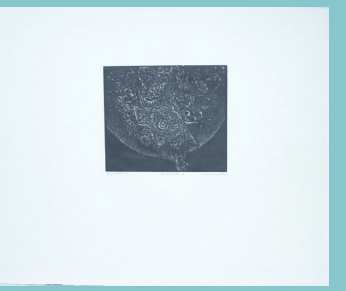
372　日和崎尊夫
「海淵の薔薇」
1972年　32.8×18.3　EA
サイン　木口木版　少ヤケ
250,000



373　日和崎尊夫「五億の風の詩」　60,000
1970年　13.5×23.5　EA　サイン　木口木版
マージン右部分縦に折れ有

374　日和崎尊夫　35,000
「海淵の薔薇 - No.1」
1972年　10×10.7　限50
サイン　木口木版

375　日和崎尊夫　28,000
「海淵の薔薇 - No.2」　1972年
9.8×15.5　限50　サイン　木口木版



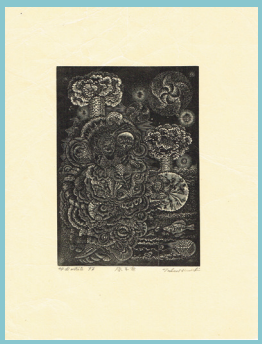
376　日和崎尊夫　50,000
「海淵の薔薇 - No.4」　1972年
13×14.7　EA　サイン　木口木版
少ヤケ　少シミ

377　日和崎尊夫　23,000
「海淵の薔薇 - No.5」
1972年　11×7.7　限50　サイン
木口木版

378　日和崎尊夫　45,000
「花獣」 1977年　12×10.5
限50　サイン　木口木版

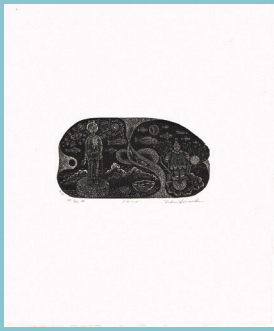
379　日和崎尊夫「KALPA - 74」　100,000
1974年　25.8×20.5　限150　サイン　木口木版
画面左上にヤケ　僅かにシミ

380　日和崎尊夫「KAOS - No.1」　170,000
1974年　33.5×26（紙寸58.5×48.6）　限50　サイン
木口木版　マージン上部と下部にヤケ・クリップ跡
全体にヤケ

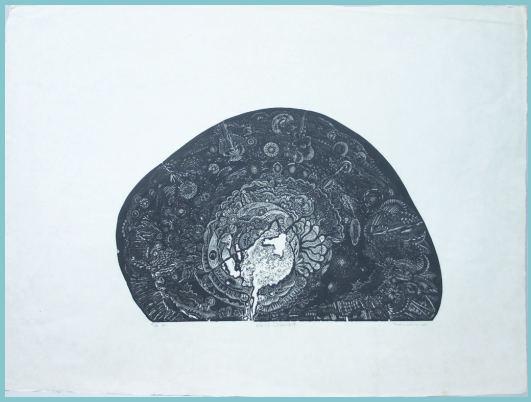


381　日和崎尊夫　28,000
「原子花」 1977年　13.8×9.8
E.A　サイン　木口木版
ややヤケ　折れジワ多数

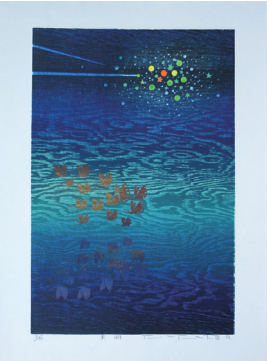
382　日和崎尊夫　15,000
「花の誕生」 1977年　9×6
限50　サイン　木口木版
マージン下辺にシミ



383　日和崎尊夫　25,000
「メルヘン」 1982年　7.2×13.5
限200　サイン　木口木版
裏面僅かにシミ



384　日和崎尊夫「KALPA - LEQUIEM」　200,000
1987年　1991年山口源賞受賞　28×42.6（紙寸52×69）限50
サイン　木口木版　全体に少シワ
マージン少シミ　左下と右上に少折れ

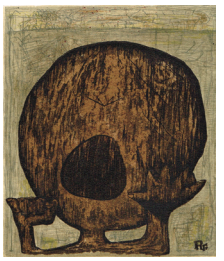


385
吹田文明
「未明」
1983年
51.7×34　限50
サイン　木版
マージン右上角
に少折れ
25,000

386　藤川栄子「パンジー」　30,000
油彩4号（23×33）　サイン　キャンバス

387　二見利節「川辺の家」　50,000
油彩8号（37×45）　キャンバス　サイン

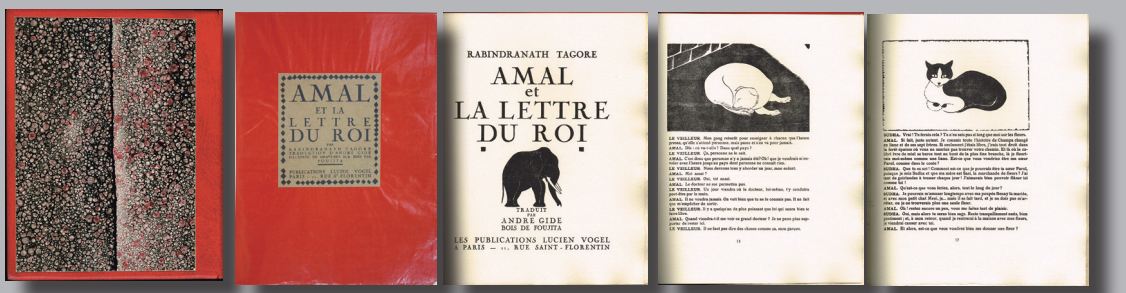
388　深沢幸雄
銅版画集『中原中也
汚れちまった悲しみに』
1998年　番町画廊
各23×18　判型51×39.5
限75　サイン　銅版12図入
保存良好
135,000



389　福井良之助
「作品」　13.8×12
刷込サイン　孔版
裏面少ヤケ
15,000

390　福井良之助「いちじく」　45,000
1957年頃　21×26　EPA　サイン　孔版
裏面に「人物」の鉛筆デッサン入
福井良宏シール付　少ヤケ　少シミ
右辺に切れ

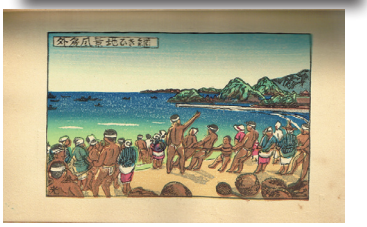
391　福井良之助　30,000
「小さな世界」　1957年
20×17　刷込サイン　孔版
福井良宏シール付
マージンヤケ・シミ



392　タゴール著／アンドレ・ジイド仏訳『アマルと王の手紙』　200,000
1922年　ヴォーゲル社（版権ガリマール社）　藤田嗣治第1作目の挿画本　木版7図入　保存良好
判型28×22　限130　仏文28頁　皮装　天金　函付

393　藤島武二「風景」　**230,000**
12×18.5（紙寸）　印　鉛筆画　東京美術倶楽部鑑定証付　裏面ヤケ　セロテープ跡

394　藤島武二「潮の岬」　**600,000**
27×36　印　紙に鉛筆とパステル　額裏面に日動画廊シール　少ヤケ



395
船崎光治郎
『御宿』
昭和32年
日本観光美術協会
判型18×12.3
サイン
自刻木版11図入
（表紙含）　ヤケ
シミ
25,000

396　『堀井英男　全版画作品集』　**17,000**
1989年　プリントアートセンター　限150　銅版画「光芒」（18×15）、「飛ぶ朝」（18×22）2図入　各サイン

397　前田藤四郎
「岬（赤石原人の海）」
1970年　41×54
印　リノカット・
フロッタージュ　少ヤケ
額装マットにシミ
25,000

398　町田久美「飼う」　**70,000**
27.5×24　AP7／7　サイン　銅版　手彩入

399　丸山晩霞「怪雲」　**30,000**
30.5×41　サイン　水彩
大正震災罹災者救護展出陳　薄い裏打

400　南　薫造
「倫敦郊外　婆安斯之初春」
1907年　133×41.5（軸寸198×55.5）　サイン　絹本共箱
少ヤケ　少シミ
250,000

401　三雲祥之助「サロメ　B」 5,000
27×41　限15　サイン　リトグラフ
手彩色　全体にマットヤケ　マージンシミ
テープ跡

402　水落　啓　　4,000
「MIDNIGHT DANCE」
1984年　18×16　限50
サイン　銅版

403　三宅克己「相州大山」　　65,000
22×31　サイン　水彩　少ヤケ

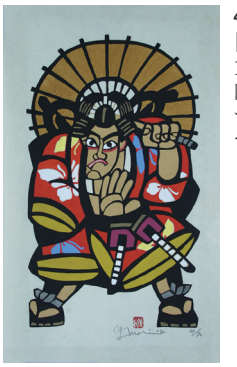
404　村上華岳「舞妓」（下図）　　700,000
大正6年作　59×52（軸寸161×68.5）　サイン無　絹本
村上伸箱書　二重箱　画面上辺に少汚れ　少傷

405　棟方志功『歌舞伎版画　第一輯　勸進帳』　100,000
昭和6年　創作版畫倶樂部（中島重太郎）発行　紙寸21.2×15
木版3図入　元袋破れ・汚れ

406　棟方志功　　38,000
「木版賀状1葉」
刷込サイン　縦に折り目
少ヤケ

407　杢田たけを「無題」　　80,000
油彩20号（72.5×53）　サイン
麻布キャンバス　油彩にコラージュ
裏面にサイン

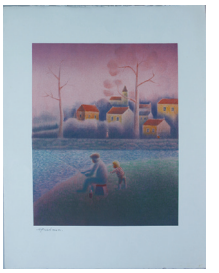
408　望月通陽　型染絵本『出埃及記』歌・塚本邦雄　38,000
1955年　湯川72倶楽部　判型38.5×31.5　型染8図入



409　森　義利
「雨の五郎」
1980年　47×27.5
限70　サイン　合羽刷
マージン少ヤケ
18,000

410　元村　平　15,000
「作品」　52×44　限100
サイン　リトグラフ

411　元村　平　20,000
「河岸の風景」　50×50
限100　サイン　リトグラフ
マージン少折れ　少シミ
少ヤケ



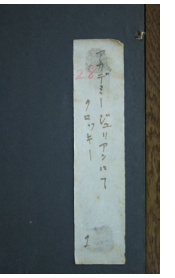
412　元村　平
「河岸の釣り人」
45×35.5　AP　サイン無
リトグラフ
マージン下辺に少シミ
5,000

413　山口逢春「菊」　12,000
37×45.5　限200　印　リトグラフ
少ヤケ　画面右部分に数ヶ所シワ

414　山口　進「焼岳」　15,000
1979年刷　29.5×39　限150　印
木版

415　山下清澄「三人の休息」　20,000
1983年　18.2×41　限55　サイン　銅版

416
豊成（山村耕花）
「初世中村吉右衛門の星影土右衛門」
「梨園の華」　1921年
40.5×28　木版
渡辺版　マージンヤケとシミ裏面少ヤケと少シミ
75,000

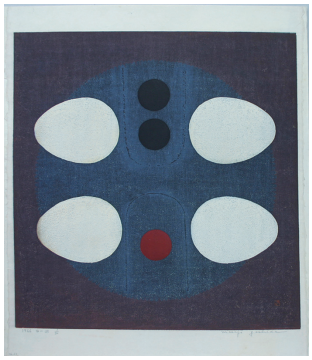


417　安井曽太郎　130,000
「アカディミー・ジュリアンにて　クロッキー」
18×22　サイン　鉛筆画　紙面ヤケ　裏面下辺に切れ1ヶ所

418　矢柳　剛　版画集『男と女　1977』 25,000
1976年　限75　サイン　シルクスクリーン8図入（各37.2×57.5）　元タトウ少汚れ

419　吉田　博　「富士拾景　馬返し」 150,000
昭和3年　37.5×25　サイン　木版　自摺
少ヤケ　裏面右下に書入れと蔵印

420　吉田　博「春日の鹿」 250,000
昭和3年　51×36　木版　自摺　全体に少ヤケ
少汚れ　シワ修復の為に薄い裏打



421　吉田政次「白い羽」 25,000
1966年　45.5×43　限1/30　サイン
木版　マージン少シミ
マージン左右端を裏打

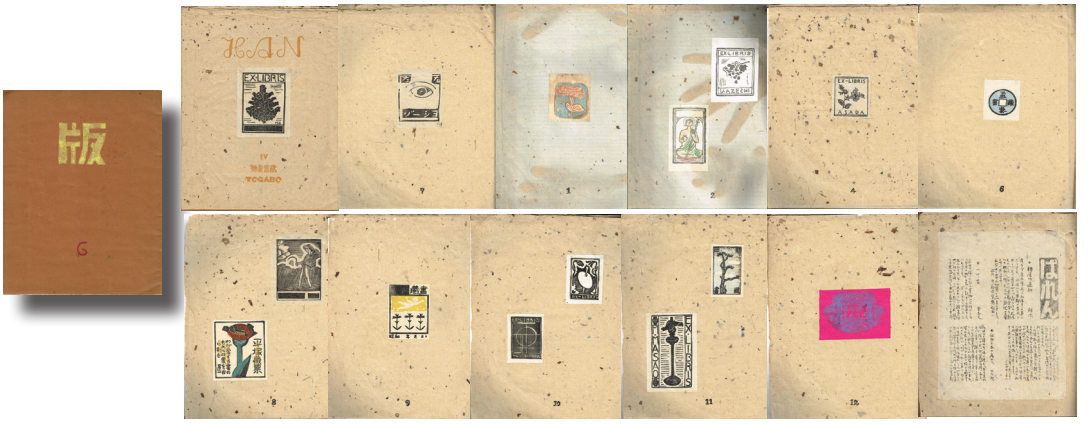
422　米倉斉加年　「作品」 20,000
芥川龍之介作『舞踏会』より　1986年　22×16　サイン
水彩　マージン下部に折れ
少ヤケ

423　渡辺幽香　「作品」 5,000
21×13.5　銅版
手彩色　全体にシミ　虫喰
折れ　裏面に幽香の印

424　脇田　和「作品」 13,000
17×15　限35　サイン　銅版
マットヤケ　裏面ヤケ有

425　『試作　No.4』第2巻第1号　**65,000**

大正15年2月 判型31.8×23　深沢索一/近藤孝太郎/村松隆次（2図）/西尾道雄（2図）/小野英一（2図）/竹内杢平/福田良四/竹内喜久一/コンスタンチン/マリア・ウフデン/ラウル・デュフィの図版全14図入　表紙傷み　ヤケ　背表紙破れ　本文少シミ



426　『版』6（蔵書票號）　**70,000**

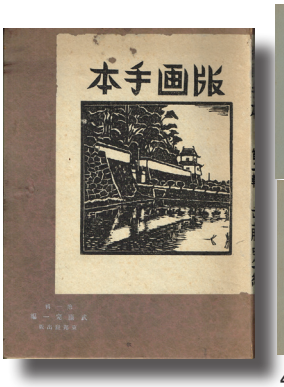
昭和3年12月　刀画房発行（前田政雄方）　判型31.5×22.2　限50　前田政雄/麻田辨次/畦地梅太郎/浅野竹二/下澤木鉢郎/平塚運一/棟方志功等　全12頁　表紙・裏表紙少汚れ　一部蔵書票に少シミ

427　『版画』創刊号（1点欠）　**25,000**

昭和2年1月　版画社（編集/発行者・野村俊彦）　版型20.5×28　横堀角次郎（3図）/土屋義郎（1図）/久泉共三（1図）の木版5図入（野村俊彦1図欠）　元袋破れ　作品少ヤケ　少シミ

428　版画集『きつつき版画集』第二輯　100,000
昭和18年　きつつき会　判型34.5×27　限100　小野忠重/平塚運一/下澤木鉢郎/前田政雄/小野忠明/武田由平/北岡文雄/武藤完一/棟方末華/石崎重利/中川雄太郎ほか合わせて木版20点
「目次」「きつつき會頒布規約」「第二回きつつき會版画展案内」「平塚運一の代金受領葉書」などの資料付　元帙切れと汚れ

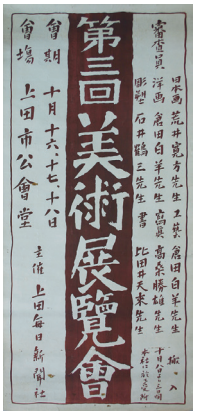
429　版画集『きつつき版画集』第二輯　85,000
昭和18年　きつつき会　判型34.5×27　平塚運一/下澤木鉢郎/前田政雄/小野忠明/武田由平/北岡文雄/武藤完一/棟方末華/石崎重利/中川雄太郎ほか合わせて木版20点揃　元タトウ欠（木函入）　目次資料欠



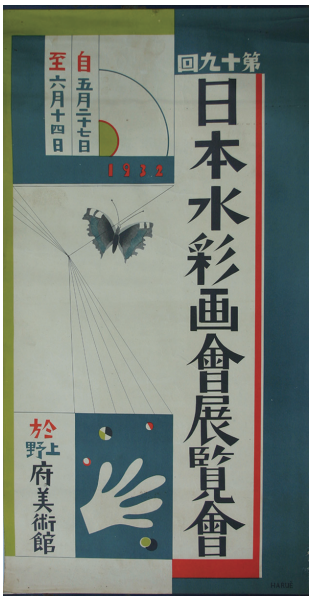
430　『版画手本』（1図欠）　50,000
昭和10年11月　武藤完一編　東邦出版　判型29×22　平塚運一「松江城」/石井鶴三「猫」/山口進「沼の朝」/小泉癸巳男「枇杷」/小野忠重「浮浪人たち」/深沢索一/下澤木八郎/前田政雄/中田一男/小林朝治/武田由平/武藤完一（木口木版）/前川千帆「水」/恩地孝四郎「廣告用小版画」(機械刷）/川上澄生「静物」/清水孝一/逸見　亨/渡辺光徳（印刷）/小林清光/児玉貞平/小川龍彦/中川雄太郎/福島常作/石井柏亭（印刷）の計24図入　**勝平得之1図欠**　台紙29×22に貼付　ヤケ　少シミ

431　「創作版画展覧會」ポスター
1922年　76.5×30.5（紙寸）　木版
神戸弦月画会主催　日本創作版画協会後援　少ヤケ　全体に巻きジワ
マージン下辺に切れ
90,000

432　「第八回日本版画協会展覧会」ポスター
1939年　78.5×36.5（紙寸）　木版　稲垣知雄画
天地の部分と画面中央下の切れを裏打修復
少ヤケ　少シミ
15,000



433　「第三回美術展覧會」ポスター　79×36.7（紙寸）
上田毎日新聞社主催
会場・上田市公会堂
少ヤケ　少シミ
下部切れ1ヶ所
10,000



436　古賀春江画
「第十九回日本水彩画會展覧會」
ポスター　1932年頃　65.5×35（紙寸）
少汚れ　右辺少切れ
25,000

434　「第九回日本版画展」
ポスター　1940年12月
日本版画協會主催
52×39（紙寸）木版
前川千帆画 全体に巻きジワ　下部汚れ　左辺シワ
15,000

435　「第九回日本版画展」
ポスター　1940年12月
日本版画協會主催
52×39（紙寸）木版
前川千帆画 全体に巻きジワ（折れ）左辺傷み
15,000

437　「第四回土曜講演會（人體の話）」ポスター
53×38（紙寸）　春陽会研究所　少ヤケ
「聴講規定」切れ　傷み
5,000

438　都鳥英喜氏 蒐集『最近佛蘭西ポスター集』 15,000
大正10年　積善館　版型27×38　全50図入　元タトウ汚れ　ヤケ

439　山崎 斌『日本国有草木染色譜』 25,000
1938年再版本（1933年初版）草木屋出版部　判型28.5×21　島崎藤村・岡田三郎助序文　元函少傷み

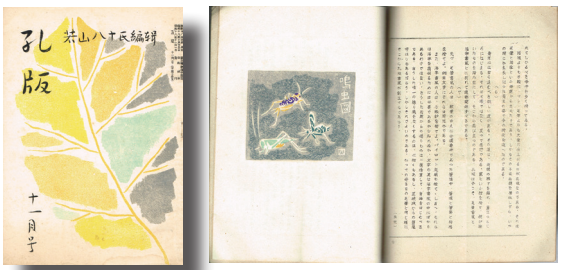
440 「大津繪」 3,000
22×15（紙寸）　高橋松山製　木版10枚入
タトウ折れジワ

441 『版画藝術』第八号 5,000
1975年冬　阿部出版　判型25.4×19.5
限42/75　関野準一郎木版1図入（23×17.8）

442 「蔵書票展覧會　出陳目録」
昭和16年（10月17日～19日）
京城府三越ホール／主催・朝鮮新聞社（京城）／書物展望社（東京）
判型12.5×14.5
8,000

443 『丹青』第二巻第二号 13,000
昭和14年8月　教育美術振興会　判型30.5×23.2　石井柏亭「スペインの女」（原色版）/池辺　釣「樂隊の女」（石版）/山下新太郎「紹ざし？」（木版）/中村善郎「湖畔」（木版）入　安井曽太郎欠　表紙少シミ

445 『第二十三回太平洋畫會展覧会』図録
会期・昭和2年12月2日～27日
判型14×11.5　ヤケ
表紙裏表紙共に少傷　剥し跡
5,000



444　若山八十氏 編輯『孔版』十一月号
昭和18年11月1日発行
20.8×14.7　ヤケ　シミ
背破れ
中央縦に二つ折の折り目
3,000

446　『HANGA』特輯　130,000
大正15年5月（第一巻）　神戸版画の家
37×29（判型）　深澤索一「代々木風景」/
平塚運一「ネギ」/川上澄生「異國雨の有景」/
森谷利喜雄「初夏風景」/大月文一「おごる神輿」/
の木版5図　ヤケとシミ（特にマージン）
カバー紙傷み

447　『版画　Hanga』No.3　春の巻　Vol. 1　25,000
1922年　版画社　判型30.5×22.5　木版　日本創作版畫協會第四回展覧會號
小泉癸巳男「早雲山より」/永瀬義郎「池畔」/柳生周三郎「社頭の夕」3図入
一部にシミ

448　深澤索一『索一自選小品集』1（1図欠）　150,000
昭和7年12月　36.5×29.2　限100　木版12図入　版型36.5×29.5　白と黒社
元タトウヤケと上辺に少切れ

近代日本版画家名覧
（1900－1945）

〈凡　例〉

1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。

2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。

3、年記は西暦を基本として、生没年については（　）内に元号を表記した。

4、作品名は《　》、書籍・雑誌・作品集などは『　』内に表記した。〔　〕内は執筆者補記を示す。

5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。

6、頻出する参考文献については以下のように表記する。

・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版　2008年）→『創作版画誌の系譜』

・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版　1991年）→『エッチング』

7、執筆者

岩切信一郎（新渡戸文化短期大学教授）
加治幸子　（元東京都美術館図書室司書）
滝沢恭司　（町田市立国際版画美術館学芸員）
三木哲夫　（兵庫陶芸美術館館長）
樋口良一　（版画堂）
植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
河野　実　（鹿沼市立川上澄生美術館館長）
西山純子　（千葉市美術館学芸員）
森　登　　（学藝書院）

8、『版画家名覧』は、版画堂のホームページ http://www.hanga-do.com/ でもご覧いただけます。

戦前に版画を制作した作家たち（10）

【し】

塩津米太郎（しおづ・よねたろう）
1932（昭和7）年5月の第3回京都工芸美術展に出品。その後、11月の第1回関西創作版画展に木版画《果実を持てる裸婦》《人形》《コップのある静物》《果実のある静物》《温室の見える風景》《電車のある風景》の6点、翌1933年1月の第3回京都創作版画協会展に《温室のある風景》《赤屋根のある風景》《果物のある静物》《コップのある静物》《静物》2点《裸婦》《人形》《年賀状》《風景》の10点を出品した。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12（1984）（三木）

塩出英雄（しおで・ひでお） *1912 ～ 2001*
1912（明治45）年4月6日、広島県深安郡福山町字鍛冶屋町（現・福山市城見町）に生まれる。1931年、帝国美術学校（現・武蔵野美術大学）日本画科に入学。東京吉祥寺に下宿する。1935年より奥村土牛に師事。1936年、帝国美術学校を卒業、同校の助手となり、後に講師、助教授となる。1937年より再興日本美術院展に出品し、初入選。以後、毎年出品し、1950年には《泉庭》で日本美術院賞（大観賞）、1969年に《春山》で内閣総理大臣賞を授賞。1970年に院展評議員となる。1963年には母校・武蔵野美術大学教授に就任。1984年に定年退職し、名誉教授号を受ける。退任を控えた1982年には、同大学美術資料館で、翌1983年には故郷の福山で個展を開催。2001（平成13）年3月20日脳腫瘍のため東京都杉並区の病院にて逝去。版画関係では当時在住していた東京吉祥寺で朴の会が発行した版画集『むさしの風景』其の1（1938.11）に《遅ノ井》を発表。【文献】『むさしの風景』1／「塩出英雄略年譜」『没後3年塩出英雄遺作展』目録（井原市田中美術館　2004）（加治）

志賀　昇（しが・のぼる） *1909 ～ 1986*
1909（明治42）年に生まれる。志賀直哉の甥。1928年、洋画家石井柏亭らが指導する東京の文化学院美術科に入学し、その後専修科でも画家としての勉強を続ける。文化学院専修科では、1933年4月から肖像画・挿画・図案などに加えて石版・エッチングの講習会を始め、エッチングについては第1回を1933年10月に、第2回を11月にそれぞれ1週間、講師に日本エッチング研究所の西田武雄を招いて開催。第1回（1933.10.2 ～ 7）には在学中の志賀昇を含めた専修科の16名が参加。制作した作品は西田主宰の研究所機関誌『エッチング』第12号（1933.10）に掲載されている。1986（昭和61）年に逝去。【文献】志賀昇「奈良時代の小林秀雄さん」『このひとを見よ　小林秀雄全集月報集成』（新潮社　2015）／「文化学院第1回講習会」『エッチング』12　（加治）

四方久之助（しかた・きゅうのすけ）
➡原田久之助（はらだ・きゅうのすけ）

重松徳保（しげまつ・のりやす）
大分の武藤完一が版画講習会を契機に発行した版画誌『彫りと摺り』（1931 ～ 1933）の第6号（1932.12）に表紙絵《鉄道線路》を発表。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」（『大分県立芸術会館研究紀要』1　2002.9）／『創作版画誌の系譜』（加治）

重見　到（しげみ・いたる）
大分の武藤完一が版画講習会を契機に発行した版画誌『彫りと摺り』（1931 ～ 1933）の第8号（1933.6）に裏表紙絵《やかん》を発表。当時、重見は大分で教員をしていたと思われる。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」（『大分県立芸術会館研究紀要』1　2002.9）／『創作版画誌の系譜』（加治）

紫水（しすい）
土井版画店より1937年に木版画《たそがれ（浜離宮）》の刊行があるが、詳細は不明。【文献】『版画堂』目録32（1997.9）（樋口）

十寒子（じっかんし）
1930年代の静岡では『かけたつぼ』（1931 ～ 1935）、『ゆうかり』（1930 ～ 1934）といった版画誌が発行されているが、そんな中で個性豊かな版画誌『版画座』（1932 ～ 1934）が発行された。その第1号（1932.11）に《秋》を発表する。十寒子は号と思われ、姓名は不明。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

品川　工（しながわ・たくみ） *1908 ～ 2009*
1908（明治41）年6月11日新潟県柏崎市に生まれる。本名は関野工。1928年東京府立工芸学校金属科を卒業。銀座で貴金属店を経営していた伯父の紹介で彫金家宇野先眠に師事するも、彫金への関心が薄れ、1931年に兄の品川力（のちに古書店「ペリカン書房」を経営）と本郷でアメリカン・スタイルの食堂を開く。その頃、モホリ・ナギの著書を読み、板金や針金による作品、紙の造形などを制作していたが、1935年に恩地孝四郎と出会い、親しく交流する中で、版画の制作を強く勧められたという。その後、光村印刷会社、農商省工芸指導所玩具研究室に勤める傍ら、版画制作にも励み、1943年第12回日本版画協会展に《花》、第18回国画展に《郷愁》が初入選。一方で、1944年には板金や針金による作品で個展（銀座・三越）を開催している。戦後は、1947年の第15回日本版画協会に《春の海》《私の材料》を出品。受賞し、会員に推挙された。また、国画会展にも出品し、同年の第21回展に出品した《海辺》と、翌48年の第22回展に出品した《海辺の幻想》《ヒカリ》で連続して国画奨励賞を受賞し、1949年の第23回展で会員となっている。以後は両展の他、1954年のルガノ国際版画展とサンパウロ・ビエンナーレ展、1956年の現代日本美術展、1957年の東京国際版画ビエンナーレ展など国内外の版画展・美術展にも積極的に出品し、高い評価を得たが、その創作領域は版画に止まらず、青年期に始めた紙彫刻・布絵・オブジェを始め、フォトグラム、モビール、立体など多彩であった。2009（平成21）年5月31日東東京都練馬区で逝去。著書に『たのしい造形　モビール』（美術出版社　1968）、『楽しいペーパークラフト』（講談社　1985）などがある。【文献】「品川工　見えてくる新しいかたち〔インタビュー〕」『Contemporary Artists　Review』11（1993.11）／『現代美術の手法[2]　メディアと表現―品川工・山口勝弘』展図録（練馬区立美術館　1996）／『日本美術年鑑』平成22年版（東京文化財研究所　2012）（三木）

篠　頼（しの・らい）

1942（昭和17）年の第11回日本版画協会展に木版画《山椿》が入選。翌年結成された「日本版画奉公会」に参加する。会員名簿の住所は中野区新山通1ノ44である。【文献】『第十一回版画展目録』（日本版画協会）／『エッチング』123　（三木）

篠崎喜一郎（しのざき・きいちろう）　*1900 ～ 1964*

1900（明治33）年、栃木県河内郡姿川村（現・宇都宮市）西川田に生まれる。河内郡雀宮尋常高等小学校尋常科卒業後、栃木県師範学校第一部に入学し、1920年同校を卒業。姿川第一尋常小学校に勤務する。1921年、栃木県立宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）に赴任してきた川上澄生が、当時たばこ屋「姿屋」を営んでいた篠崎家に仮寓したことにより川上と知り合い、交流を持つようになった。1924年には姿川尋常高等小学校に赴任し、そこで『村の版画』の創立メンバーとなる教師たちと知り合う。この頃、同僚に版画で有名な川上を紹介し、版画の指導をしてもらうことになる。その中の一人である池田信吾と篠崎の二人が中心となって版画誌『村の版画』（1925 ～ 1934）を創刊。川上は顧問的な存在であって、池田が編集発行を担当し、篠崎が支えた。その第1号（1925.1）に《午后の通り》と表紙絵、第2号（1925.2）に《寂しい道》《おもちゃ》、第3号（1925.4）に《春》、第4号（1925.7）に《花》と表紙題字、第5号（1925.9）に《軒端》、第6号（1925.11）に《ほゝの木の実》、第7号（1926.1）に《寒空》《賀状》を発表したが、第7号を刊行した後に池田が平石第一尋常小学校へ転勤となったため、当時としては交通不便な事情もあり、地域性の強い同人誌にとって実質の発行責任者を失ったことにより、『村の版画』は休刊に陥る。しかし翌1927年には、池田がより近い宇都宮市内の簗瀬尋常小学校に赴任したため1929年に第9・10・11号と復刊。篠崎も再び第8号（1929.1）に《軽便鉄道ノ給炭水所》《賀状》と表紙題字、第9号（1929）に《電柱》、第10号（1929.4）に《葉牡丹》、第11号（1930.7）に《みぅがの花》を発表する。同誌は、その後一年半ほど発行にブランクがあった後、第19号（1934.2）まで刊行されたが、篠崎の発表は第〔16〕号（1932）の《露草》のみであった。1955年の退職後は学校図書館創設など、教育者として多大な功績を残した。1964（昭和39）年逝去。【文献】浜崎礼二「創作版画の地の塩」『版画をつづる夢』展図録（宇都宮美術館　2000）／『創作版画誌の系譜』（加治）

篠崎春造（しのざき・しゅんぞう）　*1903 ～ 1931*

1903（明治35）年栃木県河内郡姿川（現・宇都宮市）西川田に生まれる。版画誌『村の版画』（1925 ～ 1934）の発行に尽力した篠崎喜一郎の実弟。河内郡雀宮尋常高等小学校尋常科卒業後、栃木県師範学校第一部に入学。1923年に卒業後、姿川第二尋常小学校に勤務する。兄・喜一郎を通して版画誌『村の版画』の存在を知り、通巻2号（1925.2）に《リベ》を発表するが、その後、版画の発表はない。1928年、法学博士を目指して休職し、中央大学に入学するも、卒業を待たずに1931（昭和6）年逝去。【文献】『版画をつづる夢』展図録　宇都宮美術館　2000）／『創作版画誌の系譜』（加治）

篠崎昌義（しのざき・まさよし）

1932年当時、日本エッチング研究所を主宰する西田武雄は、東京市内の小学校教員を招き、実習を主としたエッチング座談会を開催。その第4回が1933年6月5日に開かれ、東京芝区桜川小学校に教員として勤務していた篠崎も参加。エッチングの描き方、腐食法、プレスの仕方など直接西田から説明を受ける。その時に制作したと思われるエッチング作品と座談会の詳細が研究所機関誌『エッチング』第8号（1933.6）に掲載されている。また、篠崎はエッチングが小学校の図画教育に適していると考え「児童に最適のエッチング」と題した小文を『エッチング』第9号（1933.7）に寄稿。その後、第13号（1933.11）にも作品を発表している。【文献】『エッチング』8・9・13　（加治）

篠原　節（しのはら・たかし）

長野県下水内郡の小学校教師による下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第1号（1934.9）に《子守》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

篠原弥夫（しのはら・みつお）

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）に在学中、同校生徒が発行した版画誌『刀』に参加。第8輯（1930）に《塔のある風景》、第9輯（1930）に《万里の長城》、第10輯（1931）に《風景》、第11輯（1931）に《札幌植物園》、第12輯（1931）に《風景》を発表。1932年同校を卒業。【文献】『版画をつづる夢』展図録（宇都宮美術館　2000）／『創作版画誌の系譜』（加治）

柴　秀夫（しば・ひでお）　*1907 ～ 1979*

1907（明治40）年、茨城県水海道（現・常総市）に生まれる。上京して商店員をつとめた。一方で木版を独習し、1932（昭和7）年4月に版画の大衆化を目標に掲げて小野忠重らと「新版画集団」を結成した。集団の第1回展（1932.10）に《少女Ａ》《少女Ｂ》《青年》など全7点を出品し、その後も第2回展（1933.3）に4点、第3回展（1933.11）に6点、第4回展（1934.6）に5点、第5回展（1935.10）に1点、第6回展（1936.10・最終回展）に9点と、逐次開催の正規の展覧会に毎回出品した。それ以外にも、集団主催の「第1回アンデパンダン展」（1934.6）や「江戸東京風景版画展」（1934.7）、「エノケンとその一座を廻る版画展」（1934.9）などのテーマ展、集団小品展（1934.4、1935.5）にも出品した。また集団発行の機関誌『新版画』の第1号（1932.6）から第10号まで、第12号、第14号から第16号、第18号（1935.12・最終号）に自作の木版画を掲載した。そのうち第2号と第7号の表紙を担当し、木版画で飾った。『新版画』発行と同じ時期に関谷忠雄編集発行の版画誌『牧神』にも版画を寄せた（第23号〔1932.7〕、第24冊〔1937.9〕に掲載確認）。「新版画集団」解散（1936.12）後は、1937年3月に版画の絵画的造形の確保を標榜して小野忠重らと5人で「造型版画協会」を結成し、第1回展（1937.6）に《凋む花》《華麗なる喪服》など4点を出品、その後も第2回展（1938.4）、第5回展（1941.4）、第6回展（1942.4）、第8回展（1949.12）、第9回展（1950.7）、第10回展（1951.8）に出品した。1941年に小野忠重と幸地貞子が創立した出版社「双林社」から、『長崎遺響』（1943.3）と『南海漂流譚』（1943.11）を編集して上梓した。戦後は、しばらく版画の制作と発表を続けたが、「新版画集団」と「造型版画協会」の仲間だった清水正博の証言によれば、パステルなどをつくる会社を

経営して業務に追われ、1955年以降創作活動から遠ざかったという。また創作版画をコレクションし、その一部を小野忠重に譲っている。1979年（昭和54）12月19日逝去。【文献】『創作版画誌の系譜』／加治幸子編著『新版画集団展目録』（『版ニュース』第4号別冊　輝開　1998）／『生誕100年 小野忠重展図録』（町田市立国際版画美術館　2009）（滝沢）

芝海友太郎（しばうみ・ともたろう）

1928（昭和3）年の第9回帝展に版画《裸婦》、翌年の第10回展にも《紅衣の女》が入選。永瀬義郎は《裸婦》について、「版の性質がよく解らない、多分オフセットだらうと思ふが、どうも版の味が工業的でよくない、あれを木版であつたら随分面白いものが出来たらうと思ふ。然し工業的な美術製版乃至美術印刷を創作版画に結びつける事は意義のある事だ。つまり大量製（ママ）産と云ふ点では何物も及ばないと云ふ特点があるからだ」〔「西洋画批評」『アトリエ』5－11〕と評している。その後、1943年に結成された「日本版画奉公会」に参加。会員名簿の住所は小石川区指谷町125である。戦後は児童書の挿絵などを描いていたようであるが、詳細は不明。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『アトリエ』5－11／『エッチング』123　（三木）

柴田耕洋（しばた・こうよう） *1883～没年不明*

1883（明治16）年仙台に生まれる。本名武雄。郷里の先輩熊耳耕年に連れられて上京、尾形月耕の門人となる。山水・人物画を得意とした。1913年第12回美術研精会展に《敗残》を出品して褒状を受ける。1924年の帝展第5回展に《浅草寺の朝》、1926年の第7回展に《花の寛永寺》、1931年の第12回展に《草御堂》を出品。関東大震災の惨状を描いた木版画集『大正震災画集』（絵巻刊行会編・日本版画社発行　1926）に《大正十二年九月一日午前十一時五十八分》《深川方面》2図と制作年不明の木版画《〔夜の舟〕》の制作が知られる。【文献】『LIGHT　IN DARKNESS：Women in Japanese Prints of Early Showa（1926－1945）』目録（Fisher　Gallery, University of Southern California　1996）／『版画にみる東京風景－関東大震災から戦前まで－』図録（太田区立郷土美術館　2002）／『Bien』45（芸術出版社　2007.8）（樋口）

柴野民三（しばの・たみぞう） *1909～1992*

児童文学作家、童謡詩人。1909（明治42）年11月4日、現在の東京都千代田区有楽町2丁目2番地に生れる。錦城商業学校を卒業。1929年に私立大橋図書館に勤務し、児童図書を担当する。北原白秋に師事し、『赤い鳥』などに投稿。子供研究社発行の小川未明主宰による雑誌『お話の木』創刊に際し、大橋図書館を退職し、編集に当たる。後に絵雑誌『コドモノヒカリ』などの児童雑誌の編集に携わる。1949年より児童文学者として童謡や童話などの文筆生活に入る。著書には『ワタシノオテガミ』（春江堂 1942）や『コンチキ号の漂流』（岩崎書店　1968）など多数あり、児童文学界に確かな足跡を残した。1961年には芸術祭奨励賞を受賞。1992（平成4）年4月11日逝去。版画関係は東京吉祥寺において朴の会が発行した版画集『むさしの風景』其の1（1938.11）に《善福寺》を発表。【文献】渡辺玲子『みんないっしょに：童話作家・柴野民三の足跡』（文芸社　2011）／『20世紀日本人名事典』（日外アソシエーツ　2004）／「柴野民三 -Wikipedia」・「柴野民三とはーコトバンク」（インターネット検索）　（加治）

芝村義邦（しばむら・よしくに） *1900～1996*

1900（明治33）年、山梨県石和に生まれる。旧制成章中学校（現・愛知県立成章高等学校）を始めとして愛知県内の教師を勤めたのち、戦後、時習館高等学校などの校長を歴任。1996（平成8）年に逝去。生前に蒐集した浮世絵や陶磁器などの美術品が田原町（現・田原市）に寄贈され、「芝村義邦コレクション」として愛知県田原市博物館に収蔵されている。版画関係では、青森創作版画研究会夢人社が発行した『さとう・よねじろう蔵書票』第3年第1集　春の集（1936. 5）に蔵書票《鳥の図》《静物》を、また同じく夢人社発行の『趣味の蔵書票』第1回（1936.9）に蔵書票《富士》《紋》《人形》を発表している。当時、愛知県豊橋市東八町に在住。【文献】『緑の樹の下の夢―青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館　2001）／「芝村義邦コレクション」（田原市博物館　2004ネット検索）　（加治）

柴山正範（しばやま・まさのり）

大分県師範学校を会場に版画講習会（1931.8・3～7講師：平塚運一）が開催され、それを契機にして武藤完一が発行した版画誌『彫りと摺り』の第8号（1933.6）に《貸しボート》を発表。1933年にも同会場、同講師により第2回版画講習会（1933.8.1～5）が開催され、『彫りと摺り』は『九州版画』と改題される。その第14号（1937.4）に《別府の山々》、第15号（1937.7）に《大手門（大分城）》、第16号（1937.10）に《奉天忠霊塔》、第17号（1938.5）に《睡蓮》、第18号（1938.11）に《青島風景》を発表。当時、柴山は大分県内の教員として勤務していたと考えられる。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1（2002.9）／『創作版画誌の系譜』（加治）

柴山義雄（しばやま・よしお）

戦前、大阪府吹田市に在住で、詩人として第一詩集『星を喰べる法』（大阪　戴冠式詩房　1927）や相原一馬・梶川政一との共著詩集『風と喇叭』（刊年不明）の刊行があり、また日月書院（大阪府吹田市）を経営し、ストリンドベリ随想・箴言集『青書』（宮原晃一郎訳　1943『青巻』は同一書物）を出版するなど出版人としても活動する。戦後は、版画図版入の〔第二詩集〕『詩と版画　暮れ残った街』（日月書院　1947）を刊行。また、此木山三訳・著『あらびあんないと』（1946）などの日月童話文庫シリーズや近藤精男編『三年生の児童が制作した童話集』（1957）の童話集などに挿絵を多数描いて出版するほか、柴山義雄編『一年生の童話読本』『二年生の童話読本』（いずれも須磨書房　1948）などの著作を持つ。版画の制作は、〔私家版〕『柴山義雄創作版画集』（刊年不明　1945頃か）と詩・版画・随筆の個人雑誌『祭日』1号・2号（1946.5・1946.8〔9号が1959.8に出版されているが、未確認〕発行はいずれも日月書院）を刊行。神戸在住の中国木版画家・李平凡とも交遊があり、未確認だが、戦前より版画の制作にかかわっていたと推測する。【文献】「柴山義雄刊行図書」『祭日』創刊号裏表紙（1946.5）／『版画堂目録』51（2002.6）（樋口）

澁江終吉（しぶえ・しゅうきち） *1889～1933*

1889（明治22）年に静岡市で生まれる。医師で考証家・書誌学者の澁江抽斎は祖父。京都で絵画を本多錦吉郎や

津田青楓に学び、東京で図案家として活躍。1926年に発足した新興工芸運動の代表的なグループ「无型」（高村豊周・藤井達吉・広川松五郎など）の創立会員である。第6回まで行われた无型展に刺繍の屏風や染物を出品しており、刺繍の名手として知られるようになった。若い頃には歌を詠み、文章を得意としていたこともあって、グループの同人誌『无型』第6号（1928.3）に「亜欧堂の版画」、第7号（1928.4）に「版画家北壽」を寄稿しているほか、『アトリエ』第6巻第8号（1929.8）の「織工弥左衛門の話」をはじめ、『中央美術』復興第4号（1933.11）には東西の染織史の研究として『美術織物の話』の連載を行っている。『名物裂の研究』（工政会出版　1933）を上梓。当時、東京市外滝ノ川西ヶ原に在住。二十歳代から固執喘息を患い、『无型』第4号（1928.1）の消息欄にも身体を悪くして今だ一進一退で全快せず、忘年会にも新年会にも顔が見えないことは淋しいと書かれている。1933（昭和8）年9月28日逝去。『アトリエ』第10巻11号（1933.11）では「逝ける澁江終吉氏の追想」として、高村豊周・香取秀真などの追悼文を掲載した。

版画関係では神戸・版画の家が発行した『HANGA』第3号（1924.9）に《無題（図案）》、第9･10合併号（1926.7）に表紙絵《牡丹》を発表。このほか、旧无型同人と教え子の集りである朱華染色刺繍研究会によって開催された遺作展（新宿・三越百貨店　1934.12.13～17）には刺繍作品や図案、絵葉書図案と共に版画作品も出陳されていることから、未確認ではあるが一時流行した版画模様屏風や版画作品も数多く制作していたものと思われる。【文献】窪丁吉「澁江終吉遺作並に朱華展を見る」『美之国』10-2（1934.2）／『モダニズムの工芸家たち』展図録（東京国立近代美術館　1983.10）／『創作版画誌の系譜』（加治）

渋川駿二（しぶかわ・しゅんじ）

1927（昭和2）年の第6回国画創作協会展第二部に油彩画《柘榴》が初入選。翌年の第7回展にも油彩画《落合風景》《山茶花とリンゴ》が入選した。同年（1928）7月の国画創作協会解散後は国画会に出品。1929年の第4回展から1944年の第19回展に連続して出品し、1935年の第10回展で国画奨学賞、1936・40・42年の第11・15・17回展で褒状を受賞。1943年に会友に推挙されている。またこの間、1930年の第2回聖徳太子奉賛美術展、1939年の第3回新文展、1940年の紀元2600年奉祝美術展、1942・43年の第5・6回新文展にも油彩画を出品した。版画は1931年の国画会第6回展に油彩画と共に出品した《秋晴》《静浦三津風景》の2点がある。【文献】「国画会展覧会略史」『第80回記念国展図録』（2006）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所　2002）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）（三木）

渋谷於寒（しぶや・おさむ）➡渋谷　修（しぶや・おさむ）

渋谷　修（しぶや・おさむ） *1900～1963（1965）*

1900（明治33）年石川県能登に生まれる。父同士が同郷とされる木下秀一郎（未来派美術協会を第2回展より主導）の父の病院で書生をしていたといわれる。1921（大正10）年10月、第2回未来派美術展覧会（未来派美術協会第2回展）に《唄へる》《愛の分裂》を出品し、未来派賞を受賞する。これ以後大正期新興美術運動の作家として活動した。1922年9月末に未来派美術協会の会員に推挙されたが、その後10月開催の同協会の第3回展となる三科インデペンデント展には「会友」として《ある夜の自像》《女》《青春時代》を出品した。一方、新興美術運動と並行して、この頃より日本蔵票会に参加して蔵書票を制作する。1923年2月に中央美術社より発行のダヴィト・ブルリュークと木下秀一郎との共著『未来派とは？答へる』の表紙デザインを行い（木下秀一郎のスクラップブックにあるエスキースより推定）、同年5月開催の同著の出版記念会にも出席した。この年4月開催の未来派美術協会習作展に出品する。1924年マヴォの運動に参加し、機関誌『マヴォ』第1号から3号まで作品図版や文章を寄せた。同年10月に木下秀一郎が提唱して創立した三科の創立会員となる。同年11月、第1回首都美術展覧会に《変質者のカルケチユア》など3点を出品する。1925年5月、三科会員作品展覧会に《名づけがたきコンストラクシヨン》など6点を出品し、同月末開催の「劇場の三科」では「丁度今が彼女の時だ」と題する一幕劇を演出した。同年9月、三科第2回展に《作品A》《作品B》を出品する。三科解散後はしばらく関西で暮らしたらしく、同年11月には大阪で「渋谷修近作個展」を開催している。その時期雑誌『柳屋』と組んで蔵書票や祝儀袋などを木版画で制作した。その後峰岸義一らと主情派美術協会を結成、1928（昭和3）年9月開催の第1回展、翌1929年5月の第2回展に出品した。その第2回展には「渋谷於寒」の名で出品。その頃に新興浪漫派の運動に参加した。また雑誌『グロテスク』にしばしば文と挿絵を寄稿する一方、「主情派現代風俗版画集」や「裸女四十四態頒布会」などを企画して広告を掲載した。1930年、峰岸や玉村らと巴里東京新興美術同盟展開催の母体となった第三形而同盟を結成した。戦後の活動は不明。1963（昭和38）年逝去とされるが、1965（昭和40）年逝去とする文献もある。【文献】『大正期新興美術資料集成』（国書刊行会　2006）／市道和豊『渋谷修アヴァンギャルドから消された男』（室町書房　2011）（滝沢）

島　静夫（しま・しずお）

1922（大正11）年の第4回日本創作版画協会展に《月の夜》を出品。出品時は大阪に住む。【文献】『版画』1-3／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所　2002）（三木）

島　成園（しま・せいえん） *1892～1970*

1892（明治25）年2月13日大阪府堺市宿院町に生まれる。本名は成栄、号成園。美人画を得意とする。父は堺で道具屋を営む栄吉（文好）、母千賀は堺・乳守廓の大茶屋成田屋の娘。兄の一翠（号御風）は画家で浅田一舟門下。父や兄の画作を見て絵を独習。北野恒富・野田九浦らに師事し、大阪絵画春秋会のメンバーとして小野小町を描き出品。文展には1912（大正元）年の第6回展からで、《宗右衛門町の夕》を出品、翌7回展にも《祭のよそおい》で共に褒状。第9回展に《稽古をのひま》、第11回展に《唄なかば》を出品した。1915（大正4）年第1回大阪美術展に出品。1918年1月に北野恒富・水田竹圃らと「大阪茶話会」結成に参加。京都の上村松園、東京の池田蕉園、とならび「閨秀美人画家の三園」と称される。明治末から昭和にかけて、大阪市南区の、鍛冶屋町27、或は清水町綿屋町角に居住していたこともあった。1920年12月に銀行員と結婚。上海、小樽、大連、横浜、松本と夫の転勤に同行。一時期画業を中断。戦後は画業に専念し、年1回の高島屋での個展開催が恒例化していた。婦人雑

誌やグラフ誌などでの挿絵・口絵での活動も盛んであった。門下に秋田成香・伊東成錦・阪野成蝶・岡本成薫など。木版では、1922 年 1 月《新錦絵帖・処女の頃》（木版 12 葉・柳原白蓮の和歌 12 首所載・大鐙閣：彫西上柳水・摺久保田保）、『大近松全集』附録木版《「夕霧阿波鳴門」の夕霧》（木谷蓬吟刊 1923 ）、1923 年から 1924 年にかけて刊行された『新浮世絵美人合』（同刊行会・全 17 枚の内）の《七月　ゆあがり》、1931 年の《舞妓》が知られる。1970（昭和 45）年 3 月 5 日兵庫県宝塚で逝去。享年 78。【文献】『20 世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社　1998）／『おんなえ　近代日本美人版画全集』（阿部出版　2000）（岩切）

島　美智緒（しま・みちお）

1931 年の夏、武藤完一は大分県師範学校において、版画教育講習会（8 月 3 ～ 7 日　講師：平塚運一）を開催する。これを機に武藤は版画誌『彫りと摺り』を創刊する。島は大分県中津市からこの講習会に参加し、その第 1 号（1931.9）に《エキスリブリス》、第 2 号（1931.11）に《人形と煙管》、第 3 号（1932.1）賀状号に《迎春》、第 6 号（1932.12）に《山の温泉場》を発表する。一方、中津市からこの講習会に参加した同宿の者 10 人は親睦と版画技術向上のために、地元に帰り、版画同人誌『空巣』を発行。島はその編集を担う。『空巣』という奇妙なタイトルは、講習会のために泊まった部屋が学生のための下宿であり、夏休みで空き巣だったことからの命名である。その第 1 号（1931）に《由布山》、第 2 号（1931.12）に《笛》、第 3 号（1932.9）に《エキスリブリス》《曼珠沙華》、第 4 号（1932）師走版に《凧》を発表。『空巣』は 4 号で休刊。その後、1934 年にも島は武田由平らと再び中津で版画と文芸の同人誌『鳩笛』を創刊する。都会的な洒落た表紙の版画誌であったが、2 輯で休刊。その第 1 輯（1934.1）に《笛》《人形と煙管》《川口》、第 2 輯（1934.4）に《無題》《エキスリブリス　2 題》《玩具》を発表。《人形と煙管》については「一寸古い趣味の感じを出さうと彫ってみました。」とコメントを寄せている。その間、東京の料治熊太が主宰した『版芸術』第 9・21 号（1932 ～ 33）に賀状を発表している。当時、中津市北部小学校に勤務。版画誌発表には通夫・美智雄・みち緒も使用している。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1（2002.9）／『創作版画誌の系譜』（加治）

島崎柳塢（しまざき・りゅうう） *1865 ～ 1937*

1865（慶応元）年 5 月 4 日（明治元年 2 月 4 日説もある）、江戸牛込に生まれる。父は儒者・島崎醉山。柳塢の通称は友輔、字は子文。柳塢の号の他に墨水漁史、栩々亭などの号もある。日本美術院に参加せずに旧派の道を進んだ。修業期には、洋画を桜井久（謙吉）、南画を竹本石亭に学び、さらに菊池容斎派の松本楓湖・川端玉章等の諸家に師事して人物・花鳥・山水を学び風俗画に新機軸を出した。1885 年から 1892 年頃まで大蔵省印刷局での紋様図案・製版・印刷の仕事に従事。その間の 1888 年以来、東京府工芸共進会・日本青年絵画会・日本美術協会・内国勧業博覧会などで活躍し賞を受賞。1894 年からは日本絵画共進会審査委員となる。1896 年「日本絵画協会結成」に参加。また 1896 年から 1898 年には三井呉服店からの依嘱を受けて染織図案を手がけたこともあった。1900 年には福井江亭・結城素明・平福百穂らと自然主義を掲げた「无声会」を結成。日本美術協会・日本画会などの委員になった。1907 年の勧業博覧会では《美音》が二等賞牌、同年の文展第 1 回展に《西鶴のおなつ》、翌年の第 2 回展に《おないどし》で、連続の二等賞牌を得、その後も入賞し、旧派の正派同志会評議員として重きを成した。1910 年からは川端画学校の教授となった。版画での木版多色摺口絵は、多くはないが、『文芸倶楽部』第 18 巻第 3 号（1912）の《文鳥》、第 19 巻第 7 号（1913）の《まつ風》などの美人画が知られ、単行本での巻頭木版口絵もある。他に新聞・雑誌での挿絵も描いている。1921 年の木版画集『義士大観』（義士会出版部）に《仙石邸の審問》を担当している。府下下日暮里に住居があったこともあった。1937（昭和 12）年 1 月 21 日、東京市荒川区で逝去。享年 71。【文献】『文学美術人名辞書』昭和 16 年第 8 版（立川文明堂　1932 年初版）／『20 世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社　1998）（岩切）

島田　要（しまだ・かなめ） *1895 ～没年不詳*

1895（明治 28）年香川県丸亀に生まれる。美術教育に従事し、1931 年頃は大阪の桜宮小学校に教員として勤務していた。1929 年の第 9 回日本創作版画協会展に木版画《新大阪風景》《菓子のある風景》が初入選。これに続く 1931 年の日本版画協会の第 1 回展には、会友として《ルンペン》《風連鍾乳洞》を出品した。1932 年会員に推挙され、同年の第 2 回に《諍ひ》、1933 年の第 3 回に旧作の《窓際の静物》（リノリューム版）と新作の《ダリヤ 1》《ダリヤ 2》《諍ひ》《舞踏（未完成）》、1935 年の第 4 回に《金魚鉢》《木津川貯木場》など 7 点、1936 年の第 5 回展に《秋果》《めざし》《松竹梅》《皮の手袋》を連続して出品。また、1934 年の「日本現代版画とその源流展」（パリ）、1936 年の「日本の古版画と日本現代版画展」（ジュネーブ・マドリッド）、「現代版画展」（サンフランシスコなど欧米 9 都市巡回）にも出品した。その後、中断もあるが 1943 年の第 12 回展にも《熱帯魚（赤蝶々魚）》など 5 点を出品している。一方、1931 年には前田藤四郎や大阪・堺の教員仲間と創作版画グループ「羊土社」を結成。版画誌『羊土』を創刊し、第 1 集（1931.6）に表紙絵（木版）と木版画《ルンペン》、第 2 集（1932.12）に表紙絵（木版）と《無題》《レツ〔フ〕トハンド》を発表。1936 年には羊土社版画展（4.5 ～ 21　大阪・金子彩陽堂）を開いている。また、他の版画誌への参加もあり、『版芸術』第 9 号（1932.12）と第 21 号（1933.12）に木版年賀状、『陸奥駒』16 集（1934.12）に木版年賀状、第 17 号（1935.4）に《おじやみ》を寄せている。1943 年に結成された「日本版画奉公会」にも参加。会員名簿の住所は大阪府堺市甲斐町東丁 3 である。【文献】『於巴里日本現代版画展準備展覧会並第三回展作品目録』（1933）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所　2002）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『エッチング』123 ／『創作版画誌の系譜』（三木）

島田　忠（しまだ・ただし）

1933 年の夏、武藤完一は大分県師範学校において、第 2 回版画講習会（8 月 1 ～ 5 日　講師：平塚運一）を開催する。これを機に、主宰する版画誌『彫りと摺り』（1931 ～ 1933）を『九州版画』（1933 ～ 1941）と改題。その第 1 号（1933.9）は講習会記念号であり、島田の木版画《読書》も掲載されていることから、この版画講習会に参加したものと考えられる。後日、平塚は講習会の思い出と共に作品の感想を武藤に送る。島田の作品については「斯う云ふのも一つの行き方で、中々よく刃物がはまっている

のはよろしい。」と評している。【文献】『九州版画』1 ／『創作版画誌の系譜』（加治）

島田墨仙（しまだ・ぼくせん） *1867 ～ 1943*

1867（慶応 3）年 10 月 9 日越前福井藩の絵師・島田雪谷の次男として生まれる。本名豊作、後に豊と改める。兄は日本画家雪湖。9 歳の頃より父に就いて四条派を学び、29 歳の時に上京して橋本雅邦に師事する。幕末勤王の志士や先哲聖賢など歴史人物画を多く描いて文展や帝展で活躍する。1942 年の第 5 回新文展出品作《山鹿素行先生》で帝国芸術院賞を受賞。1943（昭和 18）年 7 月 9 日東京で逝去した。版画は赤穂浪士の事跡をまとめた木版画集『義士大観』（義士会出版部　1921）に《義徒と細井廣澤》1 図を制作。【文献】『山田書店新収美術目録』81（2008 春）／『福井の宝　島田墨仙展』目録（福井県立美術館　2011）（樋口）

島田正允（しまだ・まさもと）

静岡の版画仲間が発行した版画同人誌『ゆうかり』第 29 号（1935.7）の「ゆうかり同人録」には名前があがっているものの作品は発表されていない。当時静岡県清水市辻町に在住。【文献】『ゆうかり』29（加治）

島田芳雄（しまだ・よしお）

東京において古仁所卓編集発行の版画誌『爆竹』は、第 4 ～ 7 号（1929 ～ 1930）が確認されている。第 4 号（1929.10）掲載の「第 3 号を見て」によると島田は第 3 号（1929）に《神戸風景》を発表しており、それについて執筆者の田中比左良は「版画の面白味をよく出してゐる。良い。コンポジションも良い。電線の太いのも面白い」と評を寄せている。第 4 号（1929.10）に《大川端風景》《フレンド女学校裏》、第 5 号（1930.1）に《麻耶子の像》、第 7 号（1930.5）に《夕暮れの別府港》を発表する。『爆竹』は創刊号から 3 号が未確認であるため、発刊の経緯は不明であるが、次第にプロレタリア美術の傾向を強めていく。その中で島田はプロレタリアを意識しない静かな版画を制作していて、《夕暮れの別府港》の感想として「昨年の修学旅行の印象です。」と書いている。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

嶋津国夫（しまづ・くにお）

山梨県甲府で秋山喜久三・杉原董三・竹村節之助の 3 人が発行した版画と文芸の同人誌『線　SEN』（1928-1931）の第 1 巻 2 号（1928.10）に《別れ》《書斎》《ポーズ》と詩「夏・即吟」を発表。ただし《ポーズ》は目次に記載されているが版画の貼付はない。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

島戸　繁（しまと・しげる） *1902 ～ 1998*

1902（明治 35）年岐阜県に生まれる。その後、彦根に移り住み、県立彦根高等女学校教諭、官立彦根工業専門学校助教授、滋賀県立短期大学教授として美術を教える傍ら、生涯彦根の漁港風景を描き続けた。1961（昭和 36）年に静岡女子短期大学（現・静岡県立大学）教授となり、約 7 年間静岡に住居をおいた。退職後は名誉教授に迎えられたが、暖かく明るい静岡から敢えて、寒いけれども愛する彦根に帰り晩年を過ごす。1977 年、彦根市功労者（文化部門）として表彰を受ける。1998（平成 10）年 3 月 14 日逝去。

版画制作については、滋賀県立今津中学校（現・滋賀県立高島高等学校）に勤務していた 1930 年当時、九州地方で最初に発行された版画誌『木版』の第 1 号（1928.3）に《浴する女等》、第 2 号（1929.12）に《ガード》、第 3 号（1930.4）に《椿》を発表。《椿》の作者言では「椿の葉の堅剛な感じ、ペルシャ壺の鈍重な光、テーブルクロスの静寂な落着き、恁う言った感じは意余って腕此れに伴はざるものがある」と記している。この『木版』は大分県師範学校の武藤完一が発行したもので、九州・四国・京都などの中学校や師範学校の教師が作品を発表している。【文献】滋賀大学築城 400 年祭《談話室》「それぞれの彦根物語」第 24 回（2006）（インターネット検索）／『創作版画誌の系譜』（加治）

清水　馨（しみず・かおる）

1940（昭和 15）年の造型版画協会第 4 回展に《追憶の断片》3 点を出品。【文献】『造型版画協会第四回展目録』（三木）

清水孝一（しみず・こういち） *1895 ～*

1895（明治 28）年 12 月 11 日東京市日本橋区駿河町に生まれる。版画は永瀬義郎に学び、1927 年の第 7 回日本創作版画協会展に《風景》3 点が初入選。翌 1928 年の第 8 回展にも《富岳》《晴日》《草（ママ）春》が入選。会員に推挙され、1929 年第 9 回展に《磯子風景》《南国小景》を出品している。この頃の清水について永瀬義郎は、谷中安規を紹介する文（「押入物語（3）」『アトリエ』1928 年 8 月号）の中で、「清水君は自転車屋さんで尺八の先生で、ようかん造りの名人で、浅草でようかん屋をした事もあり、そして油絵を描くと云ふ話だけでは変わつた人間だが、人間は至つて常識家で何もかも知り抜いた所謂苦労人で―花柳の巷は余り知らないらしいが―人の世話好きで、つまり好人物の見本見たいな人柄なのである、ふとした機会で清水君を識つてから僕が師匠格になつて清水君は木版画を研究し出した。所で今まで描いていた油絵は余り見所がないのだが、版画は清水君の性に合つたものと見えてづんづん眼に見えて進歩した。版画を始めてから未だ二年足らずに係はらず、今日では押しも押されもせぬ版画家で日本創作版画協会の会員に推薦されるし、作品は春陽会、槐樹社、太平洋に出品して注目をひてゐると云ふ訳で、目下自転車屋も、尺八の先生も、ようかんやも皆止めて終つて版画専門に精進してゐる。もう一つ愉快な事は、清水君絵では飯が食はれないと悟って、生活の為に額縁を作つてゐる事だ」と紹介しているが、日本版画社から出された『日本現代創作版画大集』（1927 ～ 1928）の摺りも担当している。文中にある春陽会展には、1927 年の第 5 回展に《石橋のある風景》《大森小景》、1928 年の第 6 回展に《市ヶ谷小景》など 4 点、1929 年の第 7 回展に《競馬場の図》が入選。また、1928 年には第 9 回帝展に《橋のある風景》が初入選。永瀬義郎は「今年度帝展の版画のピカ一であらう。全体の構図に寸分のすきがないし、橋の上に見える建物など一々変化があつたり、丸刀のタツチまでうまく樹木のマツスを出してゐる所など一寸真似の出来ない仕事だ」と評している。その後も 1929 年の第 10 回展に《山国城景の図》、1930 年の第 11 回展に《起重機のある風景》、1931 年の第 12 回展に《坂道のある風景》、1932 年の第 13 回展に《或る街の風景》が連続して入選した。1931 年の日本版画協会結成には、会員として参加。第 1 回展に《噴火口跡》《灯台》《風景》、1932 年の第 2 回展に《風景》《山の湖水》、1933 年

の第3回展に《花火》と《風景》2点、1935年の第4回展に《風景》《橋》《富士》《門》を出品。また、1934年の「日本現代版画とその源流展」（パリ）、1936年の「現代版画展（サンフランシスコなど欧米9都市巡回）にも出品した。1938年の第7回展には、「新日本百景第一期作品五十景のうち」に《外房太海》を出品したが、この作品は1939年4月に日本版画協会から配布されている。なお、旺玄社展にも出品し、1936年の第4回展で社友に推挙されているが、同会での活動の詳細は不明である。【文献】『アトリエ』4‐5・5‐8・5‐11／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所　2002）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『エッチング』123　（三木）

清水秋江（しみず・しゅうこう）

1930年代の静岡では『かけた壷』（1931～1935）、『ゆうかり』（1930～1934）といった版画誌が発行されるが、同時期に個性豊かな版画誌『版画座』（1932～1934）が発行された。その第2号（1932.12）に《静物》《影芝居》、第3号（1933.1）に《田町附近》《画状》、第2年2号（1933.2）に《煙突1》、第2年5号（1933.5）に《城内風景》と表紙絵、第2年6号（1933.6）に《朝顔の芽》《風景》、第2年7号（1933.7）に《オカンヂャケ》を発表。第2年2号（1933.2）の《煙突1》について「この煙突百景を完成してみたいのです。工場の煙突、湯屋の、長屋のと煙突はつきない。」と抱負を述べているが、煙突の作品群は確認できていない。当時、清水市二番町清水鼎方に在住。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

清水澄夫（しみず・すみお） *1919～*

1919（大正8）年5月9日、長野県北安曇郡大町（現・大町市）に生まれる。長野県師範学校二部1年に在学中、同校生徒による版画誌『樹氷』第1号（皇紀2598年版）（1938）に《読書》を発表する。同校を1939年に卒業。以後、1950年当時は松本市田町小学校に教員として勤務、1964年には木曽郡開田西小学校の教頭、1967年に東筑摩郡会田小学校の校長となり、松本市今井小学校校長を最後に1977年退職する。その後、松本筑摩高等学校美術講師などを勤める。日本美術教育学会会員。信州美術会会員。日本水彩画会展、白日会展出品。著書に『子供の絵の見方導き方』（電算出版企画　1982）がある。1982年には長野県松本市女鳥羽に在住。【文献】『子供の絵の見方導き方』（電算出版企画　1982）／『卒業生名簿　昭和25年』（信州大学教育学部本校　1950）　（加治）

清水武次郎（しみず・たけじろう） *1915～1993*

1915（大正4）年和歌山市に生まれる。和歌山県師範学校に学んだ。1930（昭和5）年に清水が赴任した小学校では「綴り方（作文）」の指導が熱心に行われており、先生たちが謄写版で子どもたちの文集を手作りしていた。学生の頃から絵を描いていた清水は、絵画の製版を得意としていた先輩教員の奥山勇の影響を受け、自分の手で美しい印刷物が作れる謄写版の面白さに魅了されていった。

この版でより創造的な仕事をしたいと考えるようになった清水は、小泉與吉の励ましをうけて独学で謄写版の技術を学び、教職のかたわらカット集の制作を始めた。そして、終戦の年、1945年に奥山と謄写印刷所「蝸牛工房」を開くことを決め、翌年5月には、さっそく『創作かっと図案集』を発行した。謄写版による雑誌『とうしゃ文化』の創刊もこの年であった。『とうしゃ文化』は全国の謄写版技術者に送られ、反響を得た。なかでも、清水の独特な作風に注目した孔版画家・若山八十氏からは、自らの絵で、自ら版を作り、自ら刷る「創作版画」としての謄写版を勧められ、本格的に版画の制作に進むきっかけになった。

清水が謄写版を始めた頃、版の技術は洗練され、精密な絵画の再現まで可能になっていたが、版画を制作していたのは若山や板祐生をはじめとする限られた作家だった。清水は謄写版だけに可能な表現に魅力を感じ、試作を『とうしゃ文化』で発表し、1947（昭和22）年から、全国の版画家たちが集まる日本版画協会展への出品を始めた。ほかにも国画会展、関西の美術を刷新することを目標に創立された汎美術家協会展にも出品するようになった。

1967年に展覧会への出品をやめたあとも、清水の制作は昼間の謄写印刷所の仕事が終わった後に続けられた。そして1971年に和歌山市の小松原画廊で初めての個展を開き、以来、個展をおもな作品発表の場とした。ロウ原紙ばかりでなく、新しく開発された和紙をもとにした孔版原紙をはじめ、さまざまな素材と技法による孔版によって独自の表現を追求し、1978年に若山らの「点の会 日本和紙孔版画作家展」の創立に参加したときには、見る人を驚かせる自在な作風に到達していた。機械化されない、手仕事による謄写版、和紙による孔版に愛着を持ちながら、その枠のなかにおさまらない大らかな表現は、抑えられない創造の喜びがそのまま表れたかのようである。

1980年、和歌山の若い版画家らと「和歌山版画80年の会」を結成、1993（平成8）年逝去するまで出品を続けた。【文献】清水武次郎「カット談義」『孔版界』4（孔版社　1947.11）／若山八十氏「孔版画の進出」『孔版』56（日本孔版研究所　1949.6）／若山八十氏「清水武次郎さんの消息」『孔版』62（日本孔版研究所　1949.12）／「清水武次郎回顧展リーフレット」（ギャラリー・ビュッフェファイブ　1984.11）／『アートニューズ』18（白石画材サービスルーム　1979.3）／「孔版画一筋に生きる　清水武次郎」『アートニューズ』21（白石画材サービスルーム　1984.1）／「清水武次郎の孔版画　Mimeograph」33-41頁、清水武次郎「孔版画ひと筋」42-43頁、浜田邦男「人間　清水武次郎」44-45頁、『季刊　版画館』18（川合書房　1987.4）／「終わりのないものを―白石寛の仕事」（ギャラリー白石　1994.10）／赤山俊治「和師展を見る」『五月会報』11／『とうしや文化』1～19（和歌山謄写美術協会　1946.7～1948.4）／『日本版画協会目録』／『国画会目録』（植野）

清水禎三（しみず・ていぞう）

九州大分の武藤完一は大分県師範学校において第2回版画講習会（1933.8.1～5　講師：平塚運一）を開催し、それを機に版画誌『彫りと摺り』（1931～1933）を『九州版画』（1933～1941）と改題する。その第12号（1936.12）に《海岸風景》、第13号（1937.1）に《燕》を発表。1941年当時、大分県北海部郡臼杵校に勤務。【文献】「『九州版画』誌会員」（『九州版画』24　1941.12）／『創作版画誌の系譜』（加治）

清水利治（しみず・としはる）

富山県に生まれる。1927（昭和2）年東京美術学校彫刻科木彫部に入学。彫刻を学ぶ傍ら、校友会版画部に参加。

1928年2月に校内で開かれた「椎ノ樹第1回創作版画展」に木版画《風景》《村》《夜景》、6月の第3回展に《顔》《黄ろい花》《赤坂風景》を出品。1932年同校を卒業。同年の第13回帝展に彫刻《スキヤー》、1940年の紀元2600年奉祝展にも彫刻《伝統》が入選している。その後の活動は不明であるが、1970年頃は富山市五福末広町に住む。【文献】伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春　創作版画の名品』図録（和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館　2010）／『校友会月報』16-8・17-3（東京美術学校）／『東京芸術大学百年史　東京美術学校篇　第三巻』（ぎょうせい　1997）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『同窓生名簿　東京美術学校　東京芸術大学美術学部　東京芸術大学大学院美術研究科』（同窓会名簿編集委員会　1972）（三木）

清水房雄（しみず・ふさお）

版木会発行の創作版画集『版』第2輯（1937.2）特集「竹に寒雀」に2点の木版画を発表。版木会は同誌に掲載されている校章や題材から愛知県知多郡師崎町（現・南知多町）の学校（当時・師崎町立師崎中学校）の版画同好会と考えられる。なお、『版』は第12輯までの発行を確認しているが、第1・3・4・8・9輯は未確認であり、目次等に作者名はあるが、作品名は記載されていない。【文献】『版』2　（加治）

清水正博（しみず・まさひろ） *1914 ～ 2011*

1914（大正3）年、東京下谷（現・台東区）に生まれる。清水の自記記録（メモ）によれば、1932（昭和7）年12月に小野忠重に誘われて、その年4月結成の「新版画集団」に参加したという。その後集団の第2回展（1933.3）に《都市風景Ａ》《都市風景Ｂ》など6点を出品し、その後も第3回展（1933.11）に6点、第4回展（1934.6）に6点、第5回展（1935.10）に1点、第6回展（1936.10・最終回展）に6点と、逐次開催の正規の展覧会に毎回出品した。それ以外にも、集団主催の「第1回アンデパンダン展」（1934.6）や「江戸東京風景版画展」（1934.7）、「エノケンとその一座を廻る版画展」（1934.9）などのテーマ展、集団小品展（1934.4、1935.5）にも出品した。また集団発行の機関誌『新版画』の第7号（1933.1）から第18号（1935.12・最終号）まで毎回自作の木版画を掲載した。そのうち第10号と第16号の表紙を担当し、木版画で飾った。「新版画集団」解散（1936.12）後は、1937年3月に版画の絵画的造形の確保を標榜して小野忠重や柴秀夫ら5人で「造型版画協会」を結成し、第1回展（1937.6）に《花々》《出発》の2点を出品、その後もアジア・太平洋戦争をまたいで開催された同協会展に毎回出品した（1954年開催の第12回展まで）。またこれら小野忠重を中心としたグループの展覧会以外に、1935年開催の日本版画協会第4回展と翌1936年開催の同協会第5回展、1936年開催の国画会第11回展にも出品した。1943年6月か7月頃、その年5月結成の「日本版画奉公会」の会員となる。同年末頃か1944年初めに応召し、負傷もしくは病気のため1944年末頃（推定）復員する。戦後は旺玄会版画部の委員としても活動したとされる。2011（平成23）年10月26日逝去。【文献】『創作版画誌の系譜』／加治幸子編著『新版画集団展目録』（『版ニュース』第4号別冊　輝開　1998）／『生誕100年 小野忠重展図録』（町田市立国際版画美術館　2009）（滝沢）

清水三重三（しみず・みえぞう） *1893 ～ 1962*

1893（明治26）年10月8日三重県四日市市に生まれる。本名「佐藤三重三」。1919（大正8）年東京美術学校彫刻科選科を卒業。卒業後に日本橋の清水家に婿入り養子となり「清水」姓となる。挿絵画家・彫刻家であることを生涯貫く。在学中から挿絵を描き（1916年3月『新演芸』）、卒業の1919年3月には自ら装幀・挿絵（木版画）・編集をした『朝寝髪』を春陽堂から出版。震災で絶版になり、好評の爲、新たに絵を描き替えて1927年7月15日に同じく『朝寝髪』のタイトルで（木版の彫・大倉九節、摺・田口陽康）春陽堂から出版。美校では木彫を主に学び、1927年から1932年には、「構造社」に参加。その後は美校同窓の木彫の会「木芽会」、「第三部会」に彫刻作品を出品。木版では、大正末に木版墨版に手彩色の「芝居スケッチ肉筆着彩版画の会」を自ら代々木初台の自宅に興し、1926年1月下旬に《鏡獅子（五代目中村福助の女小姓弥生）》（二回配布）、《吉右衛門・梅の由兵衛》（三回配布）などを刊行（5回5枚企画の中、2枚は確認したが、全部出たのか未確認）。1928年「主情派美術会」に参加し、「主情派現代風俗版画集」木版画《長襦袢芸者雨を聴くの図》制作。1940年の《寿門松お菊》（大判錦絵・限定300部）などがあるが全貌は不明である。1958年、自著画『小唄絵本　鬢のほつれ』刊行。1962（昭和37）年10月29日東京都渋谷区で逝去。享年69。【文献】『構造社展　昭和初期彫刻の鬼才たち』展図録（宇都宮美術館　2005）（岩切）

清水　豊（しみず・ゆたか）

長野県北佐久郡小諸町（現・小諸市）に生まれる。長野県師範学校二部1年に在学中、同校生徒による版画誌『樹氷』第1号（皇紀2598年版）（1938）に《夏の山》を発表。同校を1940年に卒業。1950年当時は北佐久郡小諸中学校に勤務。【文献】『卒業生名簿　昭和25年』（信州大学教育学部本校　1950　（加治）

清水良雄（しみず・よしお） *1891 ～ 1954*

1891（明治24）年8月4日兵庫県に生まれる。1911年東京美術学校予備科西洋画科志望に入学。1916年に同校を卒業し、研究生となっている。公募展への出品は、在学中の1912年に開かれた第1回光風会展に油彩画《寺院の秋》《ひなげし》が入選。以後、第2・3・5～7・15・17～30回展（1913・14・1917～1919・1928・1930～1943）に出品し、その間の1927年に新会員になっている。また、文展にも1913年の第7回展に《調べの糸》が初入選し、以後連続して出品。1917年の第11回展、1918年の第12回展、1919年の第1回帝展、1922年第4回帝展で特選を受賞している。1924年には帝展無鑑査となり、1927年の第8回帝展では審査員を務めるなど、官展系の作家として活躍した。一方、童画家としても知られ、1918年7月に鈴木三重吉が創刊した童話雑誌『赤い鳥』（1918.7～1936.8　全196冊）の挿絵を創刊号から表紙絵・口絵（163冊）を担当。1927年には武井武雄らと「日本童画家協会」を設立している。版画については、東京美術学校の時代に結城林蔵と伊東亮次のエッチング実技の実習を受けているが、1932年には洋風版画会の会員となり、同年の第3回展に《たんぽゝ》《小鳥》を出品している。戦時中に広島県芦品郡へ疎開。戦後は、1946年の第1回日展に油彩画を出品したのを皮切りに、第4・6・8回展（1948・50・52）にも出品。また、光風会展へは1948年の第34回展、1952・53年の第38・39回展に出品している。

また、1950年には広島大学講師となっている。1954（昭和29）年1月29日広島で逝去。【文献】『東京芸術大学百年史　東京美術学校篇　第二巻』（ぎょうせい　1992）／『文展・帝展・新文展・日展　全出品目録大正期美術展覧会出品目録　明治四十年―昭和三十二年』（1990）／『第85回記念光風会目録集』（1999）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所　2002）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／草光信成「回顧」『エッチング』42／『東京朝日新聞』（1932.5.10）／『20世紀物故洋画家事典』（美術年鑑社　1998）（三木）

志村量美（しむら・かずよし） *1905 ～ 1988*

1905（明治38）年4月27日、山梨県豊富村（現・中央市）大鳥居3204番地、農業志村名登利の長男に生まれる。山梨県師範学校（現・山梨大学教育学部）を卒業。中巨摩郡（現・甲西町）大明小学校をはじめとして、教員生活を戦前から戦後まで37年間続け、豊富小学校校長で退任する。在職中から絵画、詩歌などの芸術教育を児童たちに教え、退職後は豊富村文化協会の初代会長となる。豊富村郷土研究会を組織し、郷土資料館設立に寄与するなど村の文化行政・美術振興に尽力し、山梨県教育功労者表彰、勲五等旭日双光章、村政功労者を受賞。1988（昭和63）年6月5日逝去。

版画制作については師範学校時代に技術を習得し、芸術教育の一環として子供たちに教えると共に、山梨美術協会展などへ版画を出品し、個展の開催も行った。料治熊太発行の『版芸術』第30号（1934.9）に志村量美詩画集「花を育てる」として詩と版画作品を発表。料治は同号のあとがきで志村のことを甲州の山峡の詩人で、今回の作品は類型的であるが、どこか瞑想的なところがあって、一茎の花の楽しさを描こうとする作画態度に好感が持てると紹介している。このほか、同じく料治が発行した『版画蔵票』第4号〔1938.2〕に蔵書票《山峡の村》自家用、第5号〔1938.3〕に《かはほね》吉田鴻崖氏用、第7号〔1938.5〕に《あんどん》堀田和義氏用を発表。1938年には山梨美術協会会員に推挙され、山梨造型美術展などに出品。生涯、版画の制作を続けた。著書には、1973年11月から朝日新聞に連載した新風土記「山菜とり」のカットを本にした版画集『山菜図譜』（志村量美　1975）、詩集『花曇る』（サンニチ印刷　1968）、『曽根丘陵地帯の豊富村郷土散歩』（豊富村教育委員会　1980）などがある。【文献】「版画家・志村量美」『豊富村誌』下巻（豊富村役場　2000）／『創作版画誌の系譜』（加治）

志村立美（しむら・たつみ） *1907 ～ 1980*

1907（明治40）年2月17日群馬県高崎に生まれる。本名は仙太郎。神奈川高等工業学校図案科を中退して、模様師山川霽峰の徒弟となる。1924年に、その霽峰の息子で日本画家・挿絵家の山川秀峰に内弟子として入門。その後、鏑木清方一門の「郷土会」、あるいは師の山川秀峰・伊東深水主宰の「青衿会」に日本画を出品。印刷絵画では、髷物、現代ものを問わず、世態風俗、美人風俗をてがけて昭和期の代表的挿絵画家である。1915年、18歳の時の『愛児の友』（掲載の「岩見重太郎」）を始め、『婦女界』、『主婦の友』などの婦人雑誌の口絵、挿絵での活躍がよく知られ、新聞挿絵では『毎夕新聞』連載の邦枝完二「接吻市場」が最初というが、『東京日日新聞』、『読売新聞』などの新聞連載小説挿絵で活躍。特に1934年の林不忘「丹下左膳」、角田喜久雄「妖棋伝」、1938年の小島政二郎「人の妻椿」などが知られる。戦後に、出版美術家連盟の会長。1976年の作品集『美人百態』で日本作家クラブ賞受賞。版画には、奥山儀八郎主宰「日本版画研究所」（版元金田信武・金田商店）から、木版画集『現代美人風俗五態』の《追羽根》《舞始め》《花吹雪》《丸髷》《夏たけて》を出版（昭和二十年代末から没年にかけて製作されたものと推定）。1980（昭和55）年5月4日東京都新宿区で逝去。享年73。「うるんだ瞳の麗人像」に多くのファンがいる。そのために、作者没後の復刻複製木版、肉筆画複製工芸版なども多い。【文献】『日本美術年鑑』昭和56年版（東京国立文化財研究所　1983）／『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社　1998）（岩切）

志村　浩（しむら・ひろし）

東京吉祥寺の「朴の会」は年賀状の交換から始まり、版画集『むさしの風景』の発行に至る。会の連絡先が志村方になっていることと「朴の会御通知」としてあとがきを書いていることから、志村が編集発行を行ったと思われる。出品者には当時東京吉祥寺近辺に住んでいた版画家の織田一磨をはじめ、日本画家の塩出英雄、児童文学作家の柴野民三など、絵画や文学など芸術関係者が多く含まれている。志村は創刊号にあたる其の1（1938.11）に《高井戸浴風園》を発表。なお、其の2まで発行されていることは写真で確認できているが、其の2の内容については不明。当時、東京市外吉祥寺2073に在住。【文献】『むさしの風景』1　（加治）

下澤木鉢郎（しもざわ・きはちろう） *1901 ～ 1986*

1901（明治34）年1月30日、青森県弘前市和徳町に、下山竹二郎の次男として生まれる。本名は喜八郎。旧姓「下山」、後に「下澤」姓となる。高等小学校の在籍当時、長女ノブの嫁ぎ先である竹内家に通い義兄助七と交流を持つ。助七は竹童と号し、また助七の兄兼七も「無為舎」の俳号を持つ俳人兄弟で、結社「渋茶会」を結成していた。そこで、1915年に結成された自由律を主軸とした『層雲』弘前支部（その後、1918年「群青社」、1931年「鷹の会」へと改名）にも参加する。その一方、正当俳句の「十和田」（1931結成）にも参加していた。下澤の俳句への拘りは生涯一貫してあって、俳人としての美意識が、創作者として下澤の感性の礎となる。又、俳号であり、絵画作品の号でもある「木鉢郎」はこの俳句の世界から生まれた。

1916年には、画家を志し、兄祐三郎を頼って上京し、一時本屋に勤めるが、築地新富町で印刷所「浩文社」を経営していた兼七から中央美術社を紹介され入社する。中央美術社には、1921年に徴兵検査を受けるために帰郷するまでの2年間勤務する。在籍の期間、仕事の関係から石井柏亭・平塚運一らと知り合う。この出会いは、下澤の画家としての将来を決定する重要な出会いとなる。帰郷に先立ち1921年の第8回日本水彩画会展に《寒空》、第9回光風会展に《冬の鉄橋》を出品し入選する。これが下澤にとって最初の公的展覧会の出品となる。1923年の除隊の後、積極的に絵画制作に取り組み、翌1924年の第5回帝展に《堀割》（テンペラ画）が入選したほか、第11回日本水彩画会展に《雪霽》を出品し会員に推挙され、以後同展に出品を続ける。さらに同年の第6回日本創作版画協会展にも《焼跡風景》を出品し、下澤の版画作品の最初となる。そこには平塚運一の存在が強く反映する。1928年棟方志功を伴い代々木上原の平塚運一宅に行き、棟方志功を紹介する。以後棟方と平塚の交流が始まる。

1930年の第5回国画会展にテンペラ画2点と木版画《ドクダミ》を版画としては初出品し、以後国画会展にテンペラ画とともに版画の出品を続ける。第6・8回展で、国画会奨学賞を受賞。同年の第7回日本創作版画協会展には《林檎畑の冬》を出品して会員に推挙される。さらに平塚運一の指導の下に「刀画房」（事務所は代々木上原の前田政雄宅に置く）が設立され、同年12月に版画同人誌『版』を創刊、同誌に下山は第8号（1929.7）まで作品を発表する。1931年、「日本創作版画協会」を改称し「日本版画協会」が設立され、第1回展から17回展まで会員として出品を続ける。1932年下澤文平の長女菊江と結婚し、その後「下澤」姓を名のる。1933年には郷里の弘前において、黒瀧俊雄・粂田恵造らと集い「錆刀社」を設立し、同年2月に版画同人誌『版曹』を創刊、第3号（1934.1）まで刊行する。1934年には平塚運一宅に於て「日曜版画会」が開催され、畦地梅太郎･前田政雄らと共に参加する。この研究会参加者を中心に1941年末には平塚運一を代表者として「きつつき会」が結成され、翌1942年7月には「第1回きつつき会版画展」（第2回展は43年7月）が開催され、《浅間　熔原》《萬葉版画　醜の御楯》を出品する。同年8月には『17年版　きつつき版画集』（翌年には18年版〔第二輯〕を出版）が出版され、《雪景》を発表する。この「きつつき会」は創作版画運動内に於ける、平塚運一を主軸とした一つの流れを形成する。下澤もその重要な会員として席を置く。1942年に弘前市から東京府下北多摩群狛江村に転居。翌年には私家本『句と版画　狛江村』を出版する。更に同年、第18回国画会展に《岩窓》を出品し、国画会版画部会員に推挙される。1952年に棟方志功が結成した「日本板画院」に北沢収治・笹島喜平・棟方未華・ワルワーラ・ブブノワらと参加し、第1回展に《あけびと葡萄》《東洋紡績浜松工場1・2》を出品。以後は日本板画院展、国画会展が主要な発表の場となる。1954年には日本板画院展ゴッホ賞を受賞する。同年に雪景を画題とする「雪の絵毛筆即写展」、翌年には「雪ばかりの版画展」を開催するなど、雪景を画題とした展覧会を2カ年にわたって開催する。1955年には関野準一郎との共著『板画の技法』を宝文館より出版する。本書の著者略歴で下澤は「板画家」と記載する。1957年第1回国際版画ビエンナーレに《唄う子》《お師匠さん》を出品する。1959年には句集『方尺の空』を出版。その後「本の会」を発足させ、私家本として『雪景色』（1960）・『越後路』（1961）・『みちのくの句』（未確認）の3冊を出版する。1961年には多年にわたる版画の普及活動が認められ「青森県褒賞」を、1966年には「国画会四十周年功労賞」を受賞する。1969年には『県政のあゆみ』の表紙絵を描く。そして翌年には、その表紙絵の12ヶ月分を『陸奥十二題』（12点1組）として頒布会を催す。1972年に青森県立図書館で「下澤木鉢郎版画回顧展」、1978年狛江市から千葉県流山市に転居。1979年には弘前市立博物館において「下澤木鉢郎作品展」を、1985年には「日本的抒情の版画家　下澤木鉢郎作品展」が開催される。1982年には、長年の版画制作と普及活動の功労で紺綬褒章を受章する。1986（昭和61）年6月8日、千葉県松戸市に於いて逝去。享年85歳。

下澤木鉢郎の版画は、地方風俗・風景を画題とし、輪郭線をはっきりと描き、落ち着いた色彩を駆使した情感の溢れる作品となっている。そこには若き日より俳諧の世界に身を置いていた、下澤ならではの美意識がはっきりと見て取れる。【文献】船水清著『版画家　下澤木鉢郎』（青森県文芸協会出版部　2000）／『下澤木鉢郎版画集』（北方新社　2003）／『創作版画誌の系譜』（河野）

下澤文平（しもざわ・ぶんぺい） *1884 ～ 1974*

1884（明治17）年、青森県北津軽郡板柳町大字田中町に生まれる。1904年青森県師範学校を卒業。青森や北海道で尋常小学校教師として勤務。1918年に北海道礼文郡深井尋常小学校の校長となり、尺忍尋常小学校の校長を経て、1934年に退職。弘前市茂木町に居を移すが、1938年に東京府北多摩郡狛江村に永住の居を構える。1974（昭和49）年12月25日逝去。版画関係は、下山木鉢郎と粂田恵造・黒滝俊雄の3人が弘前で創刊した版画誌『版曹』（1933 ～ 34）の第3輯（1934.1）に《利尻富士》を発表。なお版画家下山木鉢郎は文平の長女菊江と1932年に結婚し、1934年頃から下澤姓を名のる。【文献】下澤菊江『おちこち』（ふだん記全国グループ　1977）／『緑の樹の下の夢―青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館　2001）／『創作版画誌の系譜』（加治）

下田　力（しもだ・ちから）

大分県大野郡では生野正義を中心に郡下小学校教員を主体にした大野版画協会が設立され、版画誌『大野版画』（1933 ～ 1934）を発行する。下田もその第1号（1933.12）に《野菜》、第2号（1934.2）賀状集に《犬》を発表しており、当時、郡内の教員として大分県大野郡に在住と考えられる。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1（2002.9）／『創作版画誌の系譜』（加治）

下村為山（しもむら・いざん） *1865 ～ 1949*

1865（慶応元）年5月21日伊予国松山藩、現在の愛媛県松山市に生まれる。本名下村純孝。為山と号す。1885（明治18）年二神フジと結婚し二神姓となる（1895年離婚、以降は下村姓に戻る）。1883年上京、本多錦吉郎の彰技堂、その後小山正太郎の不同舎で洋画を学び、明治美術会展に出品。1890年第3回内国勧業博覧会に《慈悲者之殺生之図》を出品して褒状を受ける。新鋭洋画家として注目されるが、1891年従兄の俳人内藤鳴雪を介して正岡子規を知り、「牛伴（ぎゅうはん）」と号して俳句制作にのめり込み、次第に洋画から離れ、新境地を求めて俳画家に転じる。東京・大阪・松山などを転々とし、市井の一俳画人として、1949（昭和24）年7月10日疎開先の富山県で逝去した。版画の制作は、明治20年代に「二神純孝」名で、《団子坂菊花》（日本堂　刊年不明）、《ニコライ教会堂》《鹿鳴館》（いずれも日本堂　1890）などの石版画や『ホトトギス』の中心的挿絵画家として、俳誌『ホトトギス』の表紙絵・挿画・応用図案、文芸雑誌『趣味』第5巻第4号（易風社　1910.4）の木版口絵、『現代俳画集』春之部（俳画堂　1915）の木版挿画などの制作がある。【文献】『描かれた明治ニッポン～石版画〔リトグラフ〕の時代～』展図録（神戸市立博物館ほか　2002）／『隠れた巨匠』展冊子（東村山ふるさと歴史館　2004）／寺口敦治・井上芳子「大正初期の雑誌における版表現－『月映』誕生の背景を探って－」『大正期美術展覧会の研究』（東京文化財研究所　2005）／「為山略年表」『子規派の画人・為人』小冊子（きらめき2015春号 vol.84　松山市文化協会　2015.4）（樋口）

下村観山（しもむら・かんざん） *1873 ～ 1930*

1873（明治6）年4月10日和歌山県に生まれる。本名

晴三郎。1881年東京に移り住み、狩野芳崖・橋本雅邦に師事する。1889年東京美術学校の第一期生として入学、同期に横山大観・西郷孤月らがいた。この頃より観山と号す。1894年2月に同校を卒業し、3月より同校助教授となるが、1898年の校長岡倉天心辞職に際して、天心に従って同校を辞し、天心・大観とともに日本美術院の創設に携わる。五浦時代を経て、1901年東京美術学校復職して、教授に任命される。1903年から1905年にかけて英国に留学し、欧州各地を巡る。1908年同校教授を辞任。1914年横山大観とともに日本美術院を再興し、同院代表画家の一人として活躍した。1913年実業家・原三渓の招きで横浜本牧に移り住み、1930（昭和5）年5月10日逝去。版画は、赤穂浪士の事跡をまとめた木版画集『義士大観』（義士会出版部　1921）に1図と前田青邨・安田靫彦・小林古径らと合作の木版画集『傳教大師御絵伝』（比叡山延暦寺　1929）に1図の制作がある。【文献】『開館記念特別展　下村観山』図録（山種美術館　1980）／『山田書店新収美術目録』50（2002秋）／『生誕140年記念　下村観山展』図録（横浜美術館　2013）（樋口）

下村孝次（しもむら・こうじ）

1936年8月8・9日の両日、西田武雄を講師に招いて開催の京都エッチング講習会（中井平三郎幹事　関西小国民社会場）に参加。『エッチング』47号（1936.9）に「エッチング雑感」、『同』64号（1938.2）に「エッチング禮讃」を寄稿。当時エッチング研究所製のプレス機を所有し、京都エッチング協会会員に名を連ねる。【文献】『エッチング』47・64（樋口）

秋方（しゅうほう）➡瀧　秋方（たき・しゅうほう）

秀木（しゅうぼく）

前田青邨・安田靫彦・下村観山らと合作の木版画集『傳教大師御絵伝』（比叡山延暦寺　1929）に木版画1図を制作。【文献】『山田書店新収目録』50（2002秋）（樋口）

春宵（しゅんしょう）

三好米吉発行の『柳屋』47号〔上方趣味の巻〕（1932.10.9）の広告欄に、「春宵氏画」による〔木版画〕《新橋駅》《歌舞伎座》（『新錦絵東京名所』2枚　壱円）刊行の広告が掲載されているが、作品は未見。（樋口）

松雲（しょううん）➡湯川松雲（ゆかわ・しょううん）

庄田鶴友（しょうだ・かくゆう） *1879 ～ 1948*

1879（明治12）年9月28日奈良県柳生村に生まれる。本名常喜。鶴友、暁観とも号す。1898年京都市立美術工芸学校絵画科を卒業。山元春挙に師事。1907年第1回文展に《海辺》で入選以降は1918年の第12回文展までほぼ毎回出品を続け、この間1910年に京都市立絵画専門学校助教授となり、のち教授として1922年まで後進の指導にあたる。1919年の第1回帝展開設に際しては、反官展を標榜する画家たちにより結成された日本自由画壇に創立同人として参加。1931年脱退して、1933年の第14回帝展より官展に復帰し、帝展・文展・新文展に出品を続けた。山水画と風景画を得意とする。1948（昭和23）年4月25日京都で逝去。版画は、赤穂浪士の事跡をまとめた木版画集『義士大観』（義士会出版部　1921）に《伏見の里》1図を制作。【文献】『山田書店新収美術目録』81（2008春）／『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社　1998）（樋口）

庄田耕峯（しょうだ・こうほう） *1877 ～ 1924*

1877（明治10）年9月25日東京神田に生まれる。狩野快庵編『狂歌人名辞典』（広田書店　1928）によれば「名は完、尾形月耕の門人にして風俗画を善くす、傍ら雲の屋峰助の号を以て狂歌を詠ず、大正十三年七月一日歿す、年四十八」とある。1895年日本青年絵画協会第4回絵画共進会に《人形舞図》で三等褒状を受賞。1907年文展開設にあたっては、国画玉成会の結成に参加するが、絵を描いていたのは30歳頃までで、その後は絵筆を断ち、根岸に住んでもっぱら雲迺家蜂助、連辞公子などの雅号で狂詩や狂歌などの制作に転じたと言われている。1924（大正13）年7月1日逝去。版画の制作は、明治末から大正期にかけて、縮緬本出版の版元長谷川（後に版元西宮与作）から《〔大晦日（下町風景）〕》《〔月夜の湖畔〕》《〔夜の大橋〕》など浮世絵風な輸出用木版画の制作がある。【文献】『LIGHT　IN DARKNESS：Women in Japanese　Prints of Early Showa（1926 － 1945）』目録（Fisher Gallery, University Of Southern California）／『The　new　wave』（Hotei Japanese　Prints　1993）／「明治の浮世絵師　庄田耕峰」japan.digitaldj-network.com/articles/21303.html）　／『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社　1998）（樋口）

荘田スマ子（しょうだ・すまこ）

大分県大野郡では生野正義を中心に郡下の小学校教員を主体とした大野版画協会が設立され、版画誌『大野版画』（1933 ～ 1934）を発行する。その第1号（1933.12）に《ばら》を発表。「葉の脈があって良い」と版画誌『九州版画』の主宰者武藤完一が『大野版画』第2号（1934.2）に評を記している。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

庄（荘）野宗之介（しょうの・そうのすけ） *1876 ～ 1958*

1876（明治9）年9月7日福岡市伊崎浦に生まれる。伊甫と号す。1900年東京美術学校西洋画科を卒業後、研究科に在籍。美校では浅井忠に師事するが、浅井のパリ留学、京都工芸専門学校教授への転籍は、庄野にとり不運であった。しかし、在学中の1897年第8回明治美術会（10点）、翌年の創立10年紀念展（13点）に水彩画・油絵を出品。1900年パリ万国博覧会、1904年セントルイス万国博覧会に出品。1903年第5回内国勧業博覧会に《針仕事》（油絵）を出品して褒状を受け、その活動には華々しいものがあった。1902年の太平洋画会の結成に際しては、石井柏亭・大下藤次郎らと参加し、第1回展から7回展まで出品、その一方、庄野伊甫の名で1907年第1回文展に入選し、その後も帝展（9回展）、日展（8回・10回展）に入選している。在京中、和田万吉編『西洋笑話』（吉川弘文館　1904）の図版を描き、和田は「序」で「此編若し文字に於て始て読者の頤を解くに足らずとも、尚ほ画図に於て其眼を慰むることを得ば画家庄野宗之助君の功殊に没すべからず」と賞している。1904年（第9巻3号《鴨脚樹》）から1908年（第11巻10号《雨》）にかけて『ホトトギス』の裏表紙絵や図版をたびたび描いている。また『平旦』第1号（1905.9）の石版図版《老婆》・第4号（1906.1）の附録絵葉書《日向ぼこり》を描き、『方寸』第1巻3号（1907.7）の表紙絵《昼帰》・第3巻1号（1909.1）に図版《子守》を描いている。学生時代の岩波茂雄とは「三十九年春三、四月頃、上野桜木町東漸院に移つて自炊して居た。同宿

に一高以来の友人で法科大学生の故人山本唯次、太平洋画会の画家である庄野宗之助（号伊甫）が居た」（安倍能成『岩波茂雄伝』93頁）という。1910年夏目漱石は横浜の渡辺銀行の渡辺和太郎が希望した庄野の「御婆さんの画」を斡旋している。その遣り取りの書簡の中で、漱石は「庄野君に七十円に負けぬかといふたら一厘も引けぬといふて来ました。僕は其手紙のうちに芸術家の気骨があらはれて居るのを見て非常に気に入りました。彼は貧乏である。しかも自己の画を百円よりも一厘も負からぬと云ふ。其裏面には自分の画にはそれ丈の労力の価を認めぬものは買つてくれなくてもよいと云う気概が躍つてゐる。たのもしい男であります。あれだから下宿でくすぶつて情けない生活をしてゐるのであります」（『漱石全集』第23巻「書簡・中」779）と記している。大正初頭に帰郷し、1922年から1933年まで大分県立日田中学校の図画教師となり、教え子に宇治山哲平がいる。1940年福岡県美術会の創立に参加し、以後県展を主な発表の場とした。1958（昭和33）年1月26日福岡で逝去。【文献】『伊甫・庄野宗之助画集』（大森せつ　1997.9）／谷口鉄雄『西日本画壇史』（西日本文化協会　1981.4）（森）

生野眞直（しょうの・まさなお）

大分県師範学校に学び、武藤完一より版画の指導を受ける。在学中の1930（昭和5）年に武藤の主宰する創作版画誌『木版』の第3号（1930.4）に《海近く》を、第4号（1930.10）に《柵のある風景》を発表。翌1931年3月に同校を卒業し、教員になったと推定されるが、木版画を続け、同年6月の新興版画会第1回展（東京、8月：大分出張展）に1点と、9月の日本版画協会第1回に《商店街》が入選。その間、8月に大分県師範学校で開催された創作版画講習会（講師・平塚運一）に参加し、講習会をきっかけに生まれた『彫りと摺り』（編集兼発行者・武藤完一）の第1～3・5・6・8号（1931.9～1933.6）と、その継続誌である『九州版画』の第2号（1934.1）、第4号（1934.7）に作品を発表したほか、静岡の『ゆうかり』第5・6合併、7・9・12・13、15・16合併号（1931.12～1933.7）にも作品を発表した。1934年8月には大分県師範学校で開かれたエッチング講習会（講師・西田武雄）に参加しているが、その時の肩書きは「師範学校専攻科」となっている。【文献】『日本版画協会第一回展出品目録』／『エッチング』22／『郷土図画』5（1931.10）／ 池田隆代「大分県における創作版画雑誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1（2002）／『創作版画誌の系譜』（三木）

生野正義（しょうの・まさよし） *1907～1977*

1907（明治40）年、大分県大野郡三重町（現・豊後大野市）に生まれる。三重農業高校（現・大分県立三重総合高等学校）卒業後、三重女学校や大野郡下の小学校で教鞭をとる。1932年頃は、大分県大野郡戸上校に、その後大野郡牧口小学校に勤務。大分県師範学校の教員・武藤完一の主宰する版画誌『彫りと摺り』第2号（1931.11）に《校門》、第3号（1932.1）賀状号に《猿》、第4号（1932.6）に《大野川風景》、第5号（1932）に《睡蓮》、第6号（1932.12）に《風景》、第7号（1933.3）に《ストーブ》、第8号（1933.6）に《職場一景》を発表する。1933年の夏休みに大分県師範学校において第2回創作版画講習会（1933.8.1～5　講師：平塚運一）が開催され、此れを機に『彫りと摺り』は版画誌『九州版画』（1933～1941）と改題される。その第2号（1934.1）に《正月の玩具》、第3号（1934.4）に《犬飼釜峡風景》、第4号（1934.7）に《風景》、第5号（1934.10）に《唐きび》、第6号（1935.1）に《ゐぐち茸》、第7号（1935.4）に《ありし日の天王寺》、第8号（1935.10）講習会記念号に《百日草》を発表。その間の1933年には生野が中心となり地元大野郡下の教員を主体に「大野版画協会」を設立。自ら編集者となって、版画誌『大野版画』（1933～34）を発行する。その第1号（1933.12）に《風景》、第2号（1934.2）賀状号に《犬》、第3号（1934.5）に《蕗の花》《エキスリブリス》、最終号となった第4号（1934.7）に《エキスリブリス》と表紙絵を発表。第1号の《風景》について、「本年夏の平塚運一氏の講習を受けての作品。（中略）単純化によって生まれる画面効果と構図と刀の切れ味をねらったところです。」と作者言に版画へ向かう姿勢を言葉にしている。また、静岡の版画同人誌にも関係していて、『かけた壺』第23号（1934.7）に《風景》を、『ゆうかり』第21号（1934.9）に《静物》、第22号（1934.10）に《瀬戸の朝》を発表。大野郡三重町に在住し、戦後は三重高校（現・大分県立三重総合高等学校）において書道教育に尽力し、1977（昭和52）年に逝去した。【文献】『創作版画誌の系譜』／「大分県芸術会館蔵品検索システム」（インターネット検索）（加治）

白井数雄（しらい・かずお）

版木会発行の創作版画集『版』第11輯（1937.12）漫画集号、第12輯（1938.1）賀状集号に木版画各1点を発表する。版木会は同誌に掲載されている校章や題材から愛知県知多郡師崎町（現・南知多町）の学校（当時・師崎町立師崎中学校）の版画同好会と考えられる。『版』は第12輯までの発行を確認しているが、第1・3・4・8・9輯は未確認。なお、目次等に作者名はあるが、作品名は記載されていない。【文献】『版』11・12　（加治）

白井一二（しらい・かずじ） *1907～*

1907（明治40）年、愛知県豊橋市に生まれる。1920年、商業学校に入学。この頃から本の虫になり、活動写真好きに。商業学校3年の頃、学校以外の友人らと詩誌『自画像』を発行し、商業学校卒業まで続く。1926年、東洋大学専門部倫理学東洋文学科に入学。東京小石川に下宿する。この頃、白山上の南天堂書房の階上で「東洋大学詩人協会」を発足させ、詩誌『白山詩人』を発行。1929年大学卒業と同時に終刊となる。大学生の時に、愛知県岡崎では村松隆次や小野英一らが版画誌『版画』（1925）を発行。第3号から短歌の同人誌『草原』と合併して、『試作』（1925～1926）と改題。白井は『試作』第3号（1925.12）に《路》、第2巻1号（1926.2）では裏表紙の木版カットを発表している。大学卒業後は豊橋に戻り、私立豊橋商業学校、その後は母校の豊橋松葉尋常小学校、豊橋高等家政女学校の教諭として勤務。この頃から、「白井麦生」と号し、俳諧を楽しむ。多趣味で、書画を好み、郷土の浮世絵を集めた。戦争が激しくなった1944年以降は大日本兵器株式会社第三製作所豊橋工場で働く。戦後は疎開しておいた蔵書の洋本を元に古本屋を始める。1998年には『麦生雑纂：白井麦生の生涯』として自伝を上梓。戦前にも白井一二編で『ゑびす国の船じるし』（穂国文庫　1938）や『一九二八年の一部：白山詩人同人詩集』（白山詩人社　1928）などを出版している。【文献】白井一二著『麦生雑纂：白井麦生の生涯』（白文堂書店　1998）／『創作版画誌の系譜』（加治）

白井壮太郎（しらい・そうたろう）

版画家・逸見享は詩人・大手拓次のために詩と版画の同人誌『異香』を発行するが、第1輯のみで終刊。白井はその第1輯（1917.1）に《誘惑の時》《秋暮るる日》を、それに加えて表紙絵《日光に浴してよろこぶ女たち》、裏表紙カットに《壺を抱ける女》を発表する。この『異香』の木版画による逸見の扉絵や白井の版画からは、象徴派的でモダンな大正期の雰囲気を読み取ることが出来る。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

白井卓治（しらい・たくじ）

1936年9月23日豊橋中学校で開催の豊橋エッチング協会例会に参加。豊橋エッチング協会会員に名を連ねるが、作品は未見。【文献】『エッチング』48（1936.10）（樋口）

白壁　康（しらかべ・やすし） *1908 ～ 1997*

1908（明治41）年熊本県宇土市に生まれる。和田英作に師事。1937年第12回国画会展に油彩画《樹間早春》が初入選。その後は創元会・一水会などに出品。1946年大分県竹田市久住町に移り住み、久住やシルクロードの風景などを描く。1976年一水会会員となる。1997（平成9）年逝去。版画の制作は、木版画《南アルプス連山》1・2・3（『山の版画集第二』 1938　各25 × 34.3cm）が知られる。【文献】『版画　80年の軌跡　明治初年から昭和20年まで』図録（町田市立国際版画美術館　1996）／「ふるさとの画家・白壁康記念絵画展」パンフレット（竹田市役所　2014）（樋口）

白川雄四郎（しらかわ・ゆうしろう）

長野県下の教師による下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第1号（1934.9）に《静夜》、第3号（1936.7）に《夏の山》、第4号（1937.7）に《或る国の外相》、第5号（1938.3）に《歩哨》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

代田恒夫（しろた・つねお） *1894 ～ 1989*

1894（明治27）年5月15日札幌に生まれる。1920年日本大学専門部高等師範科を卒業。小学校教員として勤務する傍ら、本郷洋画研究所に学び、1923年第10回光風会展に油彩画《夜の花》が初入選。その後、同展の第12回展（1925）から第17回展（1930）、第22・24・25・28回展（1935・37・38・41）に出品。また、1926年の第3回白日会展にも油彩画《早春》が入選し、同展の第4·5·7·8回展（1927・28・30・31）に出品したほか、1940年の第4回海洋美術展、1941年の第1回航空美術展、1943年の第2回大東亜戦争美術展にも出品を重ねている。版画は、1930年代に銅版画を始めたようで、1933年の『エッチング』第8・13号（6月・11月）に作品図版が掲載され、翌年の第22号（8月）には「研究所エッチングプレス所有者」として紹介されているが、当時の肩書は「豊島師範学校附属小学校訓導」となっている。また、1936年の第45号（7月）に「品川の埋立地」を寄稿し、エッチング《機械》の図版と共に掲載されている。1941年には日本版画協会の第10回展に銅版画《工作》《蘭印スケツチ》が初入選。翌年の第11回展にも《ボンガオ島（ヒリツピン群島南端）》が入選。1944年会友に推挙され、同年の第13回展にドライポイント《学徒作業》を出品した。戦後も再開展である1946年の第14回展にドライポイント《池》《三ツの舟》を出品。会員に推挙され、1960年に退会するまで同展の常連として活躍した。また光風会展へも出品し、第33・35 ～ 37・39・40回展（1947・49 ～ 51・53・54）に油彩画を出品している。1989（平成元）年6月6日小金井市で逝去。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所　2002）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『第85回記念光風会目録集』（1999）／『エッチング』8・13・22・45／『日本版画協会史　1931 － 2012』（2012）／「遺族提供資料」（三木）

城山吐峰（しろやま・とほう）

未来派美術協会の後藤忠光が主宰したグループ「青美社」が発行した版画と詩の雑誌、『青美』創刊号（1921.4）に《カフエーの夜》《春》《夢幻の響き》《踊り狂う群れ》の4点の木版画（リノカットの可能性もあり）を寄せた。【文献】『町田市立国際版画美術館紀要』3（1999）／『大正期新興美術資料集成』（国書刊行会　2006）（滝沢）

新栄（しんえい）

大正15年頃制作の《鴈治郎の紙治》《おわさ》など木版役者絵3図を確認。版元は松木平吉ともいわれるが、詳細は不明。【文献】『山田書店新収目録』24·42（1997.4·2000.10）／Helen Merrit and Naoko Yamada 著『Guide to Modern Japanese Woodblock Prints1900 － 1975』（University of Hawaii Press; Reprint edition　1995）／『浮世絵新入手速報』52（美術店絵草子　2015.4）（樋口）

新開与作（しんかい・よさく）

徳力富吉郎が指導する丹緑会発行の『版　小品集』（1931頃と推定）に井上豊久・和泉凡・秦徳三・北村勤次郎・水内平一郎・森沢謙三らと共に新開与作も木版画《〔鉄路風景〕》1点を寄せる。同版画集について徳力は、「作者は主として私が指導して居る人々で、いづれおとらぬ版画愛好者達です。（中略）大作はそれぞれの展覧会に出品して、小品は今後此の集に号を追って載せて行く事にし度いと思ひます。（中略）可愛いゝ画集が順々生まれて行く事を楽しみにしてゐます」と表紙裏に一文を記す。【文献】『版　小品集』／岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府立総合資料館紀要』12（1984）（樋口）

眞太郎（しんたろう）

東京神田で発行された版画同人誌『艸と風』第1輯（発行年不明）に《郊外》《土手場》、第2輯（1931.3）に《通学》《習作〔1〕》《習作〔2〕》、第3輯（1931.7）に《エキス・リブリス》2点を発表。苗字の記載はなく、眞太郎は画号として使われている。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

進藤一郎（しんどう・いちろう）

1931年8月、武藤完一の尽力で大分県師範学校において3日から7日まで5日間開催された創作版画講習会（創作版画倶楽部（中島重太郎）主宰、平塚運一講師）に参加する。同講習会を記念して、参加者の作品を貼付して刊行された版画誌『彫りと摺り』創刊号（大分県師範学校内・版画研究会　1931.9）に木版画《ひなげし》が掲載される。【文献】『郷土図画』1-5（大分県美育研究会　1931.10）／『創作版画誌の系譜』（樋口）

進藤孝之（しんどう・たかゆき）

飛騨高山の守洞春が中心となって発行した版画誌『版ゑ』慰問号（1938）に木版画を発表。【文献】『創作版画

誌の系譜』（加治）

神保朋世（じんぼ・ともよ） *1901 ～ 1994*

1901（明治 34）年 11 月 27 日（戸籍上は明治 35 年 4 月 25 日）、日本橋・薬研堀に生れる。牡丹園経営の父三吉、母マサの三男一女の長男。本名は貞三郎。1917（大正 6）年に朝日新聞社給仕として入社。その後、挿絵画家として名声のあった鰭崎英朋のもとに通いとして入門。「朋」の一字をもらい「朋世」の号を受ける。1920 年の『娯楽雑誌』に師匠の斡旋で挿絵を描いたのを始め、挿絵の代表作は野村胡堂の「銭形平次捕物控」で、1933 年 10 月『オール読物』の挿絵掲載から担当したのが知られる。その他、雑誌では大正末の『講談倶楽部』、昭和期の『文芸倶楽部』、『富士』、『キング』などで活躍。1937 年、上野忠雅・名取春仙等と「劇画院」を結成し、展覧会を開催。1940 年、挿絵の仕事を辞めて本画家へ道を求めて、伊東深水に師事。1949 年 7 月の『オール読物』、野村胡堂「銭形平次捕物控」から読者の熱望に応じて挿絵を再開。1982 年 6 月には小田急本店画廊で日本画個展を開催。版画には、1937 年 8 月に『神保朋世木版画集』を刊行する「神保朋世版画研究会」（自宅）を自ら組織し、私家版として、第一集《春宵》、第二集《夜情》、第三集《雨後》を刊行。三集共に彫佐藤寿録吉・摺猪村正之助が担当。この他にも 1938 年 9 月の美人画《雨》をはじめ、1939 年 1 月の《ほろ酔い》、1980 年 6 月の《静夜》、1981 年 3 月の《あたゝか》など美人画 8 点と《芭蕉翁之図》があるとのこと（未確認）。俳句にも熱心で俳誌『窓』を主宰。また「俳画芸術院」結成にも参加。著書に『耽美うき世絵ばなし』（芳賀書店　1967）がある。1994（平成 6）年 3 月 10 日逝去。享年 93。【文献】『最後の浮世絵師　神保朋世展』（弥生美術館　1997）／『おんな　近代美人版画全集』（阿部出版 2000）／『浮世絵大辞典』（国際浮世絵学会・東京堂 2008「神保朋世」項目参照）（岩切）

新見 孝（虚舟）（しんみ・たかし／きょしゅう） *1904 ～ 1955*

1904（明治 37）年 4 月 26 日名古屋市に生まれる。1924 年京都絵画専門学校に入学。在学中の 1927 年の第 6 回国画創作協会展に日本画《海苔乾す早春》が入選。「虚舟」と号する。1928 年絵専本科を卒業し、研究科に進む。同年の第 7 回国画創作協会展に日本画《漁港》《市の立つ日》が入選するも、国画創作協会第一部（日本画）は解散。同志と「新樹社」を結成し、この頃から土田麦僊に師事する。また、この年（1928）の第 9 回帝展に木版画《大島の女》が入選している。1933 年絵専研究科を修了。1934 年の第 15 回帝展、1936 年の改組第 1 回帝展に日本画が入選するも、同年（1936）師土田麦僊が逝去。このことを契機に官展から離れ、旧麦僊塾の仲間である林司馬ら 5 名と自主研究会「柏舟社」を結成し、1939 年には第 1 回展（銀座・松坂屋）を開催。1942 年には二科会に出品する洋画家と「三三美術団」を結成した。戦後は 1946 年の第 1 回日展に日本画を出品したが、1948 年頃から洋画に転じ、1954 年から自由美術家協会展に出品し、1964 年に会員となっている。また、1951 年には徳力富吉郎・亀井玄兵衛らと「京都版画協会」を結成。1962 年にはアメリカのシンシナティ美術館主催の国際版画展に出品している。1995（平成 7）年 7 月 18 日逝去。【文献】『国画創作協会の全貌』（光村推古書院　1996）／岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12（1984）（三木）

ご注文の方法

●電話・Fax・メール・葉書にてお願いいたします。

Tel. ０３（３２１９）２０２７

Fax. ０３（３２１９）２０２６

ﾒｰﾙ：info@hanga-do.com

〒 101-0051　東京都千代田区神田神保町 1-12　雅樂川ビル 1F

●送料は実費を頂戴いたします。

●ご送金は下記口座にお振込みください。

①三井住友銀行　神田支店（普通）１０６４０９３

口座名　有限会社　版画堂

②郵便局　００１８０－６－４１４８１２　版画堂

営業日　月～土（日・祭休業）10:00am ～ 6:30pm

http://www.hanga-do.com/

A　アルベルト・マルケ（1875 ～ 1947）　**165,000**

「男の頭部」 11.5 × 7.5 「a.m」のサイン　肉筆デッサン

「ウルディンスタイン東京」他シール付　全体に少ヤケ

B　アルベルト・マルケ（1875 ～ 1947）　**150,000**

「ポケットに手を入れる男」 15.5 × 7 「a.m」のサイン

鉛筆デッサン　「ウルディンスタイン東京」他シール付